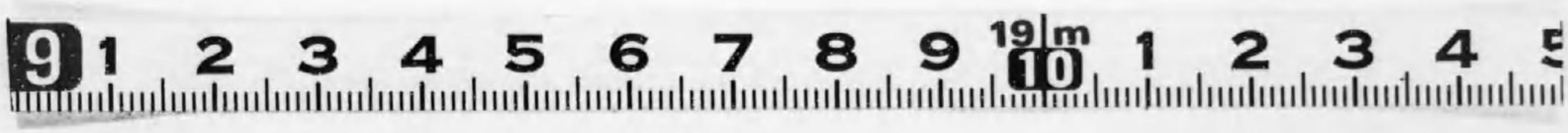


504
46

ユ-7B32
504-46

チッマの後最

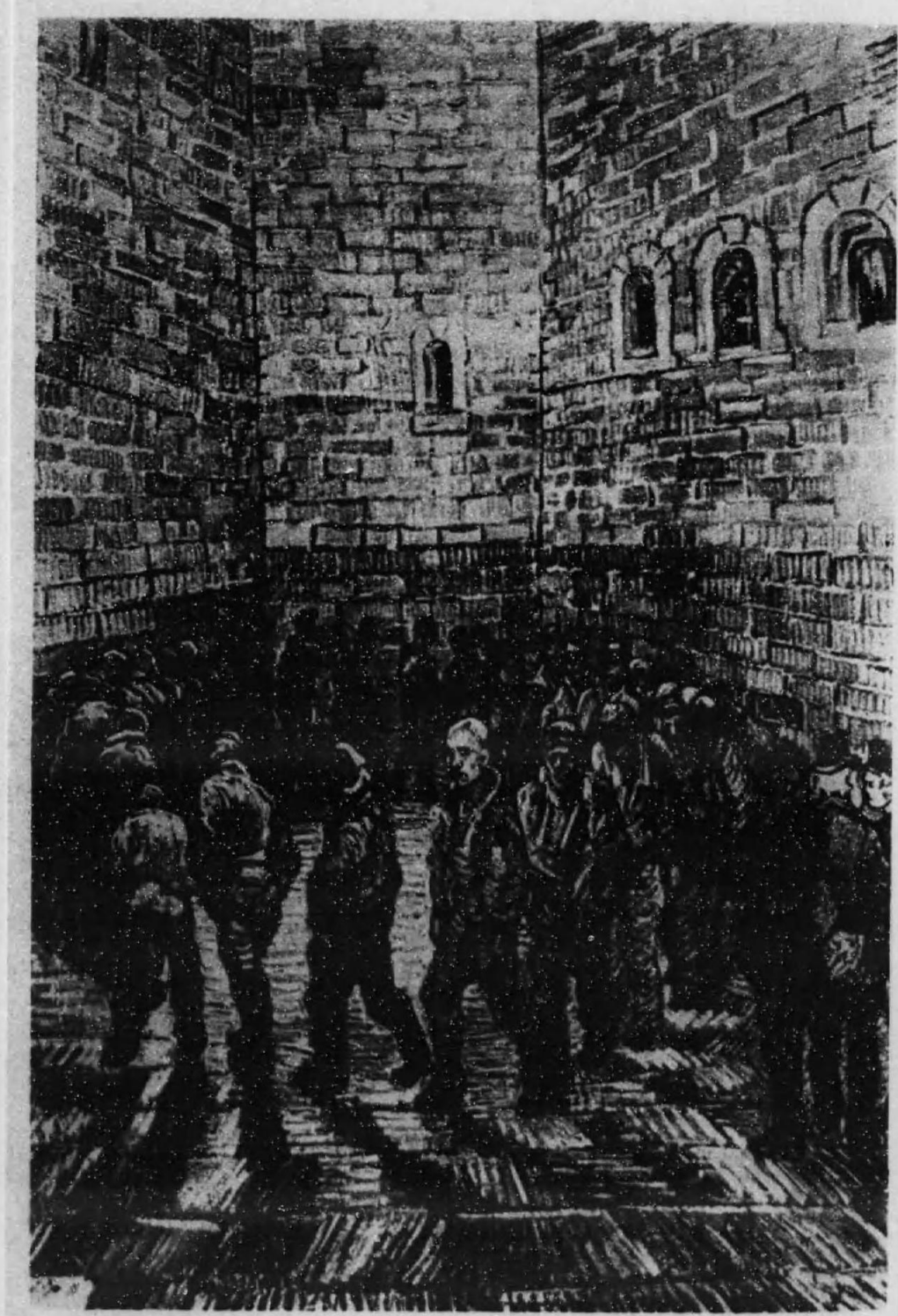
著陽播図岡

大正
11. 6. 8
内交

絞首臺（フランシスコ・デ・ゴヤ筆）

蘆みて此書を悲母の靈壇に獻ぐ

耶蘇（ダ・ヴィンチ筆）



監獄構内（ヴン・ゴオホ筆）

自序

天の窟戸は再び閉された。洪水はヒマラヤ山頂を離して居る。鵜復命らず長鳴鳥は鳴かず、樹欄の嫩葉啣みし鴿の姿も見當らない。天地は混沌として人は悉く腐り極つた。ノアの方舟に悲鳴を擧げ、諸神、常闇に泣くさへあるに、手

大正
11. 6. 8
内交

力男神の手を拱きて、宇受賣命の獨り狂へるは慘の又慘、悽の又悽ではないか。最後の燐寸は最後のトゞメを刺すの爆藥か。基督は神を以て麵麭を語り、マルクスは麵麭を以て神を說いた。佛の方便は其儘眞實、易の變易は畢竟不變である。般若を宗とする龍樹の空々は直ちに

實在の眞相であり、物理に根ざしたアインシュタインの相對性原理は絕對心理の窮明では無いか。死佛屍神を火葬る最後の燐寸は墓を蹴つて蘇る生命の火たること勿論である。即ち是、天地改造の光明、所謂大日靈貴の輝であり盡十方無礙光如來ではないか。曾ては菩提樹下

の聖者を起たしめた曉の明星と閃き、東方の博士を馬槽に導いた怪星と現れた。或は全否定の深闇を破る統一の太陽と燃え、或は舍身供養の火の火と化り、或は精神的迷信たる宗教と物質的迷信たる科學を燒盡するの薪ともなるのである。若しくは迷魂を故郷に反正す導り火

か。秘かに、密かに、唯一人の眞知己に注がんとする鬱憤の熱血か、但しは自葬自爆の懺悔の火か。不知不知我亦不知。

壬戌首夏於三味窟

著者識

最後のマッチ

目次

一　僥に墓は動いたに相違ない……一
二　深黒なる大光明……八
三　大鹽中齋と六甲山……一一
四　小沼に浮べる哀れな死體……一九
五　謎の黒焦死體……二二
六　果しなきラビリンス……二七
七　人身肥料と國家肥料……三〇
八　釋迦も御存知無き阿彌陀佛……三五

九　亂魂歸魔……三九
一〇　潛教と密教……四七
一一　アリストファーネス……五〇
一二　許由と白幽……五三
一三　長持の牛……五五
一四　破りて破れた女……五九
一五　紛骨誤廟……六三
一六　法然上人の獄門塚……六六
一七　弘法と法然と日蓮と……七二
一八　密教と易理……七三
一九　寂澄と空海と……八四
二〇　佛教と易理……九三

二一　親鸞抹殺論……一一〇
二二　新案登錄簡易筆蹟研究法……一一二
二三　親鸞聖人と石川五右衞門……一三一
二四　五右衞門とイエスキリスト……一三四
二五　六甲山靈の使者……一五六
二六　そよとの風の便りも無い……一六〇
二七　半生の夢……一六六
二八　我と無明と……一六八
二九　地獄現前……一七〇
三〇　自己彈劾、自己折伏……一七六
三一　大叫喚、大悲鳴……一七七
三二　幽魂の行方を尋ぬ……一八〇

三三 器械は生命の破壊器である……一八三
三四 蛇が火でも探して見せる……一八五
三五 眞の狂者……一八九
三六 博愛同仁の皇化……一九九
三七 天國の建設者……二〇三
三八 名醫耆婆……二一六
三九 教育否定論……二二四
四〇 辨天寺……二三九
四一 白隱の長壽法……二六七
四二 卽便微笑有五色光……二八三
四三 鏡の池と白蛇……二九〇
四四 中瘡の黑焦死體……二九四

四五 吉利支丹伴天連の隱れ家……二九六
四六 盜人を捕へて見れば我身なり……三〇三
四七 女と蛇……三一〇
四八 買人と賣人……三一二
四九 全人類の犧牲……三一四
五〇 殺己か殺佛か……三一九
五一 眞實は生長する……三二三
五二 無僧無寺院……三二九
五三 基佛一體……三三六
五四 聖德太子とイエスキリスト……三四七
五五 五右衞門の隱れ家……三五三
五六 日本と猶太……三六九

五七 千期一期の秋……三八三
五八 基佛一體の象徴……三九八
五九 壓迫は生命の肥料である……四〇一
六〇 德川政府と吉利支丹……四〇六
六一 墓前に捧ぐる好箇の供物……四一〇
六二 不動明王と基督……四一四
六三 禁制は破滅の基、秘密は爆彈よりも恐ろしい……四一七
六四 識盲……四一九
六五 自他同罪……四二四
六六 基督糞虫説……四二九
六七 中齋と親鸞…親鸞と日蓮の大闘爭……四四〇
六八 蟻螺のやうな拳……四五一

六九 糞銹……四六三
七〇 牛馬犬組合……四六六
七一 悲慘なる末路の跡……四七八
七二 六甲より昇天……四八八
七三 地風升……四九四
七四 將來の直感……四九六
七五 阿鼻叫喚と伽陵頻迦……五〇三
七六 名の命けられぬ集會……五〇七
七七 目と耳と……五一二
七八 無準備に生命がある……五一六
七九 九方皐……五二〇
八〇 天も目覺めよ地も起ち上れ……五二六

八一 大鹽先生墓所探索團……五三一
八二 有馬溫泉滅亡の兆……五四〇
八三 信金宗……五四三
八四 天滿騷動……五五三
八五 市井に隱れたる豫言者……五五八
八六 大鹽の書幅……五六七
八七 讖經自殺……五七三
八八 腥さ坊主の呪ひは精進堅固の高僧の祈りである……五八〇
八九 湯槽ケ谷の鬼……五九四
九〇 諧讖を解せぬ女は妻たるの資格が無い……五九九
九一 怪しの一つ灯……六〇五
九二 外人村……六一二

九三 涙の光……六一九
九四 人類大の責任……六三一
九五 天地創造の神……六三二
九六 耆闍崛山より眞つ逆さま……六三五
九七 墓が見える！墓が……六三九
九八 役の行者と大鹽中齋……六四三
九九 祭られざる鬼……六四七
一〇〇 生ける神殿……六五一
一〇一 自己の葬式……六五八
一〇二 六甲山下のシエリイとバイロン……六六四
一〇三 白骨で築かれた死の國の城廓……六七四
一〇四 念佛よりも失念佛……六七九

南無大鹽大明神……六一一

目次（終）

最後のマッチ

岡田播陽

一　慥に墓は動いたに相違ない

日の下に新しい物は何も無い。地球は英雄と美人と毒婦と盗賊と、而して其れ等に驅使され振飜さるゝ有象無象の古戰場である、墓である。墓の中から亡者が匍匐ひ出で、泣いたり笑つたり、拗ねたり亂暴れたり、悄氣たり惡戲えたりして纏て引込む。順繰りに古い亡者が出て來て、性懲りも無く同じ事をして死んで行く。畢竟、これに何の意義があらう。意義無き人生に、神ぢやとか佛ぢやとか、戀だの、金だのと、迷妄の影を捉へんとして、焦躁りに焦躁り、藻掻きに藻掻く人間は、思へば可憐しい極み

ではないか。『宇宙如籠雀焉能可脱』と古亡も謂つてゐる。ヂタバタしても駄目であらう。

生機卽盗機とは、盗機の秘鍵たる易理の體達者、大盗孔子の言意であるが、生くることの偷むことたる勿論である。人は生れながらの犯罪者ではないか。傷、病、自他殺の死刑囚ではないか。昔、伴天連囚の處刑中には、火銅柱を背中に縛り付け、遙かの下方に、湧き溢れて見るから清々しい泉を指して、

『彼泉に走つて身を投げよ。若しも助かつたら赦してやる！』

と、執刑官は命令する。爲に受刑者は十人は十人ながら、炭と化つて其の泉底に轉がつたと傳ふことである。生まれながらの犯罪者も、亦復是の如しで、所詮駄目とは覺りつゝも、名利の火銅柱を背垂負つて身心を爍爛しつゝ、哀れ一生を酷悶裡に突ッ走り、空しく墓穴の泉に刹到するのではないか。誰か人生を小刻みの死亡であり、緩漫なる葬儀ならずと云ふものぞ。

阿字の子は阿字のふるさと立ち出でゝ
　また立ちかへる阿字のふるさと

斯くて猶、死に交り生き代らざるを得ざる人生は、あゝ又何と云ふ悲慘な事であらう。

惟ふに眞個の宗敎は、斯うした疑問――人生其物に應へんとして案出されたものではなからうか。何處如何なる宗敎も、墓を重んぜぬものゝ無いに徵ても明かである。墓は實に宗敎の重要なる一面を表はす象徵として逸することの能きぬものである、墓より出でゝ墓に還る人生は信仰のシンボルにして亦不信のコンデンスではないか。

安見知之。吾王。高光。日之皇子。久堅乃。天宮爾神隨。神等者其乎精。文爾恐美。晝波毛。日之盡。夜羽毛。夜之盡。臥居雖嘆。飽足香裳。

斯くばかり神去りましゝ皇者の御跡を慕ふ東人はもとより、王者。天雲之。五百重之下爾。隱賜叙。

と和める都人れ、

歸る雁雲井遙かになりぬるを

霞や霧と見るぞ果敢なき

思ひは盡きざらめ、無窮を趁ふ無限の念ひ、無形を描く無心の心の絶えぬ限り、墓に涙は絶えぬであらう。

深見草ともに見し世の春ならで

萎るゝ枝に露ぞこぼるゝ

逝きにし臣下を偲び給ひて、袞龍の御袖を濡らさせ給ひし御帝もおはしまし、

さらばとて墓に蒲團もきせられず

亡き親の墓前に轉び泣く、不孝者よと呪はれし程の孝子も、盡くる期はなからうと思はれる。

極樂はありとは聞けど片だより

まづこゝろみに倅遣はす

實に墓は無線電話の受話器ではないか。

夢の世は夢の世ながらさりながら

法說かん權威も無き末法の世の僧は、墓守なり、葬儀屋なりと嘲られて居るけれども、眞の法に合ひて死者を葬り、正しく道に依りて墓を護るの僧が、今の世に果して幾人あるであらうか。況して宙宇に彷徨へる亡靈に、引導の授け得られる僧をやである。高僧聖者の靈德に憧憬れ、稽首禮拜、追薦供養せんと欲するは勿論、不德を恥ぢては先哲の靈前に泣き、怯懦に泣きては前豪の幽魂に縋り、愛妻を亡くした妻懷ひの夫、夫と永訣れし夫慕ひの貞女、子を先立たせたる慈父悲母が、綿々として憶ひに想ひ、懷うて遂に念ひ斷れぬ、切々偲々たる追慕追愛の遣る瀨無さを泣きに行く墓所、其處には果して目に見えぬ何物もゐないであらうか。背に腹に文字を刻まれて寂しく佇てる墓標、風にも雨にも無感な石の冷たさは、祭る神在すが如き、由緣の人の熱き

追慕の情を冷却さしむるもので無い限り、其處に髣髴として來り饗くる故人の靈魂の漂うてゐるのではなからうか。

墓もゆるげわが泣く聲は秋の風
少くも涙に曇つた俳星の眼には、確かに墓は動揺いだに相違ない。
まれに來て夜半もさみしき松風を
たへずや苔の下に聞きたまふらん

亡き母の墓所に灑がれた孝女の熱涙、誰か泉下の人に何等の感銘を與へないと斷言し得るものがあらう。

宜なる哉、古今東西の人傑、功成り名遂げし王者尊族、猶、自己の墓を作ることに忙しうして、埃及の金字塔は千古の謎として存し、功を頌し名を慕ふの後昆子裔、亦先人を弔ふに懶からずして、セントソフイヤの寺塔、萬代の記念として聳え、「存冢塚」「鬼類憑」「焉長貽」「後累」と、遺詔られし法皇の御陵も、後世君民の已むに已まれぬ追

慕渇仰の熱誠に築かれ、

われ死なば燒くな埋めな野に棄てゝ
飢えたる犬の腹を肥やせよ

との聖后の御意を體達せしか非耶、遺言して遺骸を野犬の餌に供へしめたと傳ふ敬信沙彌の墓碑、猶、彼方此方に建てられつゝある。亦何ぞ、

某閉眼せば加茂川に入れて魚に與ふべし

と遺命して當時の死罪者同樣に、取扱はれんと望みし善信沙彌の遺跡の莊麗なる、儉德に饒ませられ質素簡朴を旨とし給ひし明治大帝の、廟墓の壯大なるを怪しまんやである。觀じ來れば人間活動の窮極、遂に墳墓である事、猶、蠶の生活の意義が繭に存するが如くである。若し夫れ自ら墓を作りて永く眠らん事を急ぎ、敢て先人先祖の墓に賽するの餘裕無き者、彼の蠶に比して果して何の優りたる箇所ありと云ひ得やうか。

二　暗黒なる大光明

僕が大鹽中齋に對する敬慕渇仰の熱情は、彼れの出生と出身と、行蹟と哲學と心事とを探索らんが爲に、殆ど半生の心血と私財とを竭さしめて猶足らず、いかでか彼れの死所を確め、眞に其の聖骸の横るの地に接吻けて、聊か人生社會に對する憂心の忡々を、醫さんと志ざしむるに至つたのである。

一日、閑齋に靜坐し、香を炷き華を献げ、經を諷して彼れの靈に奠じ、瞑目默念すること少時、忽焉にして一場の幻象が眼前に展開したるこそ不思議なれ。只見る渺茫として際涯無き一大洋、煌々たる天日に照らされて、海波燦爛、目を眩せしむるばかりなるよと思ふ間に、小さき嶋嶼の如きものが、辛うじて視線の及ぶ地平線上に泛び出た。其の嶋影が見る〳〵近接きて、眼前に明瞭たるを諦視すれば、正に是れ一箇の丘嶽、曾て何處かで見たことのあるらしいそれで、曩の海は既に全く消え失せて、

麓には一面の人家がある。麓から中腹にかけて大小の樹木雜卉が茂つてゐる。其の間には獸に似て尾のある人々の、三々五々彼方此方に彷徨うてゐるのが、蟻の如うに小さく見える。然し嶽の頂に近きところ、突兀として禿げ、容易に攀登し難く見ゆると共に、何とも云へぬ威容が坐ろに僕の心を壓した。『あゝ靈山よ！』と、覺えず讃嘆を禁じ得なかつた。僕の眼の見るところ、嶽は宛ら水晶の如く透徹玲瓏として、內部の藏蓄がアリ〳〵と見えるのであつた。初めの程はたゞ黑闇の煙狀のもの、ムクムクと動搖いでゐるのみであつたが、間も無く其の輪廓には、金銀、瑠璃、玻璃、碎礫赤珠、瑪瑙と云つた、諸有寶石の輝きのあることが見出された。煙狀のものは中心から湧き出すやうに絶えず動搖いて、其の度に輪廓の線は隨つて伸縮弛張してゐるが、いよいよ出でゝいよ〳〵美しき寶石の光彩は、陸離として目を射るのである。其處で僕は中心に近接く程、稠密的黑暗と見ゆる其の煙狀のものが、實は全體に光明であつて、其の光明が僕の眼に認めるには、餘りに强烈な爲に、却つて黑暗に見えるのであ

ることを覺つた。僕は目眩きばかりな輪廓の美には目も與れず、一生懸命に其の煙狀の中心、光彩を湧き出す本源たる黑闇々の箇所を凝視してゐると、果せるかな、其處に人の子の如き形像がある。曾て全身を佛に供養して猛火に燒きし藥王菩薩の如く、又死より甦つた者に似てゐる。多分佛敎信者には黑佛と拜まれ、クリスチャンには復活の主と仰がるゝものらしいその人の姿が、僕の目には正しく靈化せる大鹽中齋と映じたのである。僕は驚喜しつゝ瞬きもせず、その懷しき御顏を仰いでゐると、その姿は次第に擴大されて丈六の大身と化り、奈良の大佛大となり、いよ〳〵膨脹して遂に嶽一抔に擴がつたかと惟ふと、嶽は忽ち元の凝性に復して、再び內部の莊嚴を裹み而も依然として巍々たる其の威容を名殘に、漸く其の影を薄め朦朧として遂に消え去つたのである。

僕は夢から覺めたるものゝ如く、此の幻像から我に復つたが、その印象が餘りに明晰であつて、而も意味あり氣なので、卽座の直感は、六甲山中に中齋の墓があると

云ふ其の靈告であると判斷したのである。昔時、西行上人を慕ふこと、孤兒の慈親に於けるが如くであつた似雲法師は、西行のそれと同じ姿に身を扮し、東西に行脚してその終焉の地を探し廻つたが、一日石山寺に參籠して、一心に祈願を籠めし其の夜夢に河內の國弘川寺邊の光景を見、覺めて直ちに馳せ行き、見事上人の墓を發見したと傳ふ故事もある。一心の誠は宇宙人生の如何なる幽微をも闡き、專念の祈願は能く神明の感應を齎らす。斯うした事例は古今に類稀ならぬところである。兎に角斯うした幻像を見たことが、僕をして六甲山に中齋の墓を探らしむるに至つた直接の動機である。されば斯の神靈的感應の事理を解せざる不信の輩は、僕の此の行を以て狂人的愚擧と嘲るであらうが、先賢を追慕渴仰して日夜に忘るゝ能はざる僕としては、實に已むに已まれぬものがあつたのである。

三　大鹽中齋と六甲山

僕が六甲山に中齋の墓を探るに至つた直接の動機は、前記の幻像であるが、間接の動機、否、寧ろ斯る幻像を見るに至つた二三の遠因が無いでも無い。それは中齋と山嶽、山嶽と易理、殊に六甲山と中齋との關係に就きての愚見である。

說ふまでも無く山は自然の始にして又終である。而も人は山より出でゝ山に還る。山は人間生活の母體たると共に文化の光點であり、信仰の基調である。若しも「自由は獨逸の森林より出づ」と云ふ歐洲文明史の格言が眞理であるならば、支那學の神髓たるは勿論、印度、猶太、阿列比亞の信仰は愚か、アッシリヤ、バビロニアは勿論、埃及、希臘、羅馬其の他の文化にまで大なる影響を及ぼした易の深奥なる哲理は、所謂永へに龍蛇を幽棲せしむる深山大澤に得來つたものであらねばならぬ。否、地上最も天に高き山中の所生でなからうか。されば「原始要終以爲質」と古人も繫辭てゐる。周易以前、夏殷の易に連山、歸藏の名を存し、各地の神話傳說は勿論、所有經典が山上の所談に饒めるも偶然でない。

人類救濟の福音は必ず山より響き、天啓神慮も必ず山に降る。見よ、モーゼが律法を神に享けたのも、シナイの山であり、クリストも山中に想を纏めて山上に訓を垂れた、ボーロもアレオ山中に神を說き、マホメットの信仰亦、メッカ山裡の齋す所ではないか。谷神に憧れた老子は固より山岳の謳歌者であり、母、顏氏が山に祈つて生れた仲尼亦、東山に登つて魯を小なりとし、泰山に登つて天下を小なりとした。ツアーラツストーラは山より降つて墮落したが、釋迦も山に入らざりせば成道し得なかつたであらうと思はれる。而も釋迦が山を出で老子が山に歸つたのは、永へに山の始終を語るものではなからうか。支那や印度の革命家が東北卽艮位より起るを常とし、歐洲戰爭から獨逸の頓挫、墺地利の沒落、露國の革命、波蘭の再建以來、世界統一の大英雄の蒙古より出づると云ふのも、蒙古は大山脈に渦捲かれた高原なるが爲である。

「讀一部華嚴經不如看一艮卦」と宋儒は謂つたが、華嚴、楞伽、首楞嚴の三經、もとこれ一艮卦の解說であつて、艮卦の震卦を反き、反卦風澤中孚と表裏し順逆せる

は天地一生、神人同機たる秘義を示せるもの、山は神の寶體であり山靈卽ち神靈であつて、「何も持たざるに似たれども凡てのものを持てり、萬物は彼より出で彼に倚り彼に歸すればなり、我は彼に由りて生き又動き又存する事を得るなり」と古哲の叫んだ神に對する讃言は、取りも直さず山の讃美歌である。諸有宗敎が悉く亞細亞に胚胎したのも、亞細亞は其儘にして山岳たるからである。近代文明の淵源たる歐洲亦亞細亞の一端ではあるが、要するに半嶋國で、平地の高さ、亞細亞の三分ノ一に過ぎぬと云ふではないか。支那大陸の發展も西北山地に首まり、印度古代の哲學の五山城裡に醞釀され、希臘人の信仰のオリンポス山上に其の根を育み、古今のエポックメーカーは何れも山中修業の効果を齎せるに過ぎない。アルプスの歐洲文化に及ぼせる影響、山に圍まれた山國たる瑞西が世界文化の策源地であり、世界改造の陰謀地たるに徵ても、如何に山岳の創造神たるかゞ分るであらう。スカンヂナビヤの山上が人類發生の根本地とも傳ふでは無いか。我國の文化と其の發祥も、日向の奇靈峰より發し、大和

は山跡であり、大和魂は山跡玉石火であると云ふのも、樺太山系と崑崙山系の隆起した火山脈と皺縮脈の錯綜せるに歸因する。孤島的日本の大陸化を語る寧樂朝の文化と雖も、所謂大和三山、殊に大和アルプスに負ふ所甚だ多い。日本文化史上の黃金時代たる平安期の文化に至つては、南山北嶺の山化作用と稱はねばならぬ。富士と筑波と函嶺と江戸との關係。金剛、葛城、志貴、六甲が大阪に與へた感化も亦見遁すことは能きない。

「知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽」の本文通り、山の文化は壽長く、海の文化は嚴頽れ易い。前者は自然の妙理に發足し、後者は人智に本くからである。彼は創造し此は消散する。ナイル河は埃及高峰の文化を消散し、チグリス、ユーフラットの姉妹河は高架索山脈の文化を海に注いだではないか。

「靑山卽是絕世、無人爲誰爲容」と咏はれ、「溪聲便是廣長舌、山色豈非清淨身」と讃へられし美人にして高僧たる此の山岳は、亦恐ろしき生命の劍であつて、不思議

に民情の混沌を戢破し人事の葛藤を切斷する。我國が東西聊か風習を異にせるも區々一函嶺の遮斷に基き、支那の南北が古來如何に相爭ふも全然分裂せざる所以のものは、山の之を遮るもの無きが爲であり、獨佛に介在せる白耳義にして若しも山脈なりしならんには、彼の世界的大戰も想らなかつたゞらうと想はれる。等しく易理を宗とする支那の佛教たる儒教が、印度の儒教たる佛教と其の逕庭の著しく、印度の道教たる波羅門が、支那の波羅門たる道教と全然其の趣を異にしてゐるのも、重疊たる高峰の兩地を遮斷せるが爲であり、東亞の猶太教たる○○が亞西の○○たる猶太教と萬里却絶の感ある、畢竟亞細亞てふ大山嶽の然らしむる所である。陰陽一道活殺雙及の易哲學が中央亞細亞の高原に發見されたのも亦無理からぬことゝ云はねばならぬ。

されば多少でも易を學んだ者が、俗情に死して純心に蘇らんとし、廣く海に航して外的に可見的世界に發展するよりも、寧ろ山に遯れて內包的に、不可見的世界に向上せんと欲するの傾向あるは自然の因緣である、聲も無く臭も無き上天の載を聞かん

とするも足地底を離れざるの易を信じ、天陽地陰の細緼交感して終古に渝りなき圓融無碍の妙理を體得して、無邊の虛空に無邊の世界ある、畢竟これ自己心內のもの、無邊の世界亦無數の衆生あるも、要するに身外の自己に他ならじと、大極無極、法身一體の玄義に參徹してゐた中齋が、同時に山嶽を好んで官暇しば〳〵攀登の快を貪り、口に大虛を吐いて心を洗ひ、生を慰め死を藉め、而も實人生に浸潤しつゝ、彼の所謂行卽知、信卽无の不動心に培ひつゝあつたことは疑ひを容れざる處である。分量多からざる彼の詠藻中、登山詩の比較的尠からぬに徵ても、彼れの生活の這の半面が窺はれる。

貧弱論ふに足らぬ僕の藏幅中にも、芳野から岡田半江に宛てた書翰、鷲尾山（攝州池田の西にあり）に游べる詩稿、筑紫の山僧に贈りし絕句など、山に因める彼れの遺墨がある。筆を至高至深の悲願に染めた、血文字の大神呪とも讃ふべき彼が一代の遺著「洗心洞劄記」は、親しく彼れの手に依りて富士山巓に埋められた。轉じて朝熊山頂に燔き去られた其の殘稿は、默然聲無き山靈に何事を訴へんとしたゝ、わざくれであつたらうか。

僕が幽深偉大なる彼れの心事を探らんと欲する者は、須らく鳥徑熊路を攀ぢて、世塵遠く及ばず、白雲深く千古の秘密を鎖すの境に問へと斷ふのも、決して無意味な放言ではないのである。

彼が事を擧ぐるに際し、竊に門弟某を隨へて六甲山に登り、

『我登山すること二回、能く險要を知る、事破れなば卽ち據らん。』

と語つた。門弟應へて

『險は險なりと雖も勝敗は兵にあり、師請ふ三思せられよ』

と諫めたと云ふ。此の事多く當時の記錄に載するところで、その眞僞は問はず、流俗の間に傳はつて居る。門弟某は養子格之助であつたとの說もある。況して池田、伊丹、三田、尼ヶ崎、西之宮、御影其他、卽ち六甲山麓に點々羅布してゐる村々落々に多數の門下を有し、來つて學びしは勿論ながら、時には往きて敎へしことすらあつた地理的の因緣は、さらでだに愛山癖のあつた彼れの夢魂、幾度か其の頂邊に低迷せる

白雲と共に、去來したことは更に疑ひ無きところである。

靜かなること山嶽の如き志量の中、猛火烈々の氣概を藏して、遣る瀨無き狐獨に泣きし箇の英靈漢は、今や逝いて何れのところにか在る。思うて玆に至る時、市井紅塵の裡にして、あゝ僕は目を擧げて西の方六甲を望まんとして、而も霧よりも濃き煤煙に遮られ、敢無く頭を俯して大息苦吟せしこと、果してそれ幾回であつたらうか。

四　小沼に浮べる哀れな死體

次に中齋の六甲遁竄說に多少の蓋然性を加へしめる挿話は、攝州吹田西之町濱之宮神職、宮脇志摩守の哀れな最後である。志摩は中齋の叔父、父敬高の弟で、文政六年十一月、宮脇日向存生中、娘りかの聟養子となつたのであるが、甥中齋の人と爲りに畏服し、勿論親みも深かつたので、擧兵の連判狀には、イの一番に其の名を列ねてゐる。中齋が窮民施行の爲、藏書の悉くを賣却した高義に感激して、志摩も其の身

屬さの器具一切を金に代へ、村内の難澁人に分與へたといふことである。

されば中齋が救民義擧の志を決するや、何人よりも先づ彼れに打明けたと云ふのも至當の想像である。或は病の爲に戰に參加し得なかつたと云ふ說もあるが、事實は矢張り參加してゐたらしい。兎に角、天滿方敗走後、遺棄せし大砲に、志摩の名も記されてあつたので、奉行は直ちに捕吏を宮脇方へ差向けた。所が志摩の妻りかは、夫不在中は機を織りつゝも門下の通學生に、經書の代稽古を附けてゐた程の怜悧者、槍を中齋に學び、男勝りの手腕もあるなか〳〵の女丈夫であつた。突如押寄せ來つた捕吏に、怯めず臆せず巧妙に折衝して、譯もなく其儘引取らせたのも怪しむには足らない。而して捕吏が再び引返して來た時には、志摩守の姿は既う家中に見られなかつた。彼は殊勝にも覺悟を定めて、妻が捕吏と應對してゐる間に自決せんと、奥の一間で一刀を腹に突ッ立てたが、間もなく驅付けた妻は、矢庭に刀を拷ぎ取り、疵の手當をして、死を以て中齋の後に隨ふべく、密かに甲山へ向はしめた。勿論これは不幸敗

戰の曉は、甲山に立籠つて再擧を圖らんと、一味の間に申合はされてゐたが爲である。然るに其の翌朝、とある畑中の灰小屋から、ポトリ〳〵と滴つてゐる血潮の痕を認めた捕吏は、その血潮を辿つて甲山道の小沼の中に、志摩守の死體を發見したと傳ふことである。

以上は事件當時、漸つと十五歲であつたが爲に、成規に依りて生命ばかりは助けられ、薩摩の屋久島へ流されたが、明治四年廢藩置縣の時、赦免に遭つたと云ふ志摩守の伜の伜だと自稱する老人の直話である。(此の老人の父卽ち志摩守の伜が流罪になつた時、彼方此方から祝はれたとか云ふことである。大阪府下箕面村字半丁、淨蓮寺老住職の妻女の談に、自分の親元は吹田村近くの才寺と字ふ在所ですが、亡父村上某も志摩守の弟子でしたので、矢張り祝ひに行つたと生前話してゐたことがありました云々)當時の聞書の彼れ此れに錄されてあるところと相違の點もあつて、其の儘信受れることは出來ぬとしても、彼れが甲山指して逃れたと云ふ一事は、鹽門の子路とも云

ふべき大井正一郎が中山にて捕縛されたと云ふ傳說と共に、中齋の六甲遁竄說に對して尠からぬポッシビリチーを與ふるものではないか。

五　謎の黑焦死體

論ふまでもなく幕府の公文書に據れば、中齋父子は大坂靱油掛町三好屋五郎兵衞方の離れ座敷に、自ら火を放つて死んだ事になつてゐる。しかし捕吏が火中より引摺り出した死體は眞ッ黑焦になつてゐて、事實果して其の人々であつたか否かは疑問である。たゞ捕吏中の一人二人がチラと顏を瞥たとか、聲を聞いたとか云ふところから當時の吟味役が然く決定したのであるが、勿論疑へば疑ふ餘地は大いにある。何にもせよ大鹽勢敗れて四散してより三十五日といふもの、御大中齋の行方が不明であつたので、當時世間の取沙汰は紛々擾々、人心恟々として沈着かなかつたが、六甲山に立籠つてゐると云ふ事も、確かに一部の人に信じられてゐたらしい。

三好屋自殺說を否定するものは、次の樣に云ふのである。

(イ)兎に角、一旦市中の警網を遁れ出た中齋が、再び詮議の嚴しい町中、而も救民其他の旗、差物など、擧兵當時の染物一式を調製した廉で、其筋の嚴しき吟味を受け、町預けを食つてゐる、それも法被職人同然の三好屋に投じて、死生を其處に托したと云ふことは何うしても受取難い話である。

(ロ)三好屋に於ける燒死者が中齋父子なりしや否やは、檢屍上確實でなかつたのだけれど、民心の騷擾を防ぐ爲と、旦つは本人逮捕の一手段として、假に然か定めて了つたのである。

以上(イ)の判斷、一應有理に聞えるが、それは戰術に所謂安全界に飛び込んだもので中齋が何人も、よもやと思ふほど、秘事は目睫の市中に一時身を隱したとしても、それは彼れの捨身的行動として信じられぬ事はないのである。しかし(ロ)の推定に至つては大いに參考の價値がある。燒死者の面貌が不明であつたのは、或は身代ではなかつ

たか。果して然らば幕府が民心を鎮める爲に、その屍を中齋父子のそれと斷定したのは、僞つて斯る死狀を示し、幕府の搜索の手を緩めやうとした中齋の計略にかゝつたのではあるまいか。中齋門人と自稱してゐた故田能村直入の如きは

「大鹽先生がお若い時分に、江戸へ行かれた途中、箱根で二人の盜賊を取つて壓へられたが、改心の見込ありと認められたのか、懇ろに其の不心得を戒めて赦してやられたさうですが、殺されるとのみ思ひ決つてゐた二人の賊は、その慈悲が心魂に徹したものと見えて涙を流し、「今日の御深恩は、何時か命にかけて酬ゆる時機も御座いませう」と誓つて立別れたらしい、所が其の後眞人間に立歸り大阪へ出て、蔭になり日南になり大鹽先生の身を守護つてゐたと傳ひますから、三好屋から出た彼の黑焦死體は或は此の兩人であるかも知れませぬ云々」

などゝ語つてゐた。尤もこの箱根山捕盜說は、維新後間も無く發刊された稗史小說の類にまで散見されてもあるし、今に能く人の傳ふところであるが、其實中齋の江戸

行すら今猶明かでないのである。直入の斯の談のあてにならぬのは論ふまでもない。

事實は何れにあるとしても、兎に角、後人をして、永く斯うした想像に迷はしめ、寧ろ何となく何處かに遁竄して居つたかの如うに想はしむる所に、非凡なる中齋其人の靈格が仰がれるではないか。僕は數年前、中齋研究に沒頭してゐた頃、種々の人から種々の臆說を聞かされた事である。曰く彼は大島へ渡つた。曰く朝鮮へ遁れた。支那へ行つた。イヤ米國に、イヤ和蘭陀に、濠洲に、ナーヨ雲州藩が庇護つたのだ。否薩摩藩へ落ちたのだ。伏見鳥羽の合戰が濟んでから京にも上り、東洞院蛸藥師東へ入つた處に、誰憚らず「大鹽平八郎」と表札さへ出てあつたのを見て知つて居る者がある等、紛々として更に取止めがない。前記直入も生前斯麼言を吐つた事もあつた。

『維新早々の頃であつた。大坂の薩摩邸に留守居をして居つた、石原源之助と云ふ老人に不圖出合つた機みに、大鹽平八郎といふ人は全體何ういふ容貌であつたと尋ねるから、「スラリと背の高い、鼻の高い、眉の少し釣上つた少しおデコで、全體に

於て痩形であつたが……」と答つてやると、源之助老人は丁と手を打つて、テッキリ彼人に違ひないと云ふ。「何ですか」と訊くと、「イヤ大きな聲では云へないが、只今のお話に酷似た老人を確に薩(鹿兒島)で見受けたよ」と云ふので、更に詳しく聞いて見ると、怎うやら藩にかくまはれて維新の參謀となつてゐられたらしい云々」

などゝ語つて、何だか延元元年五月四日湊川の戰敗れて湊川北方の民舍とか、奥平野の廣嚴寺の塔中無爲庵とかで、七十二人の殘徒と一緒に、弟正季と耦刺へて死んだと云ふのは家來が身代りに立つたので、本人は僧侶姿に身を扮し漁船に潜れて海路紀州に遁れ、後河内に入りて潜かに正行を指揮してゐた。と傳ふ楠公遁竄説を聯想せしめたこともあつた。

それに大正五年の夏亡くなつた木蘇岐山(漢詩人)、生駒の瀧寺に隱棲してゐた岡村閑翁(再昨年亡くなつた、森田山外の弟子)、九十三歳の高齡を以て閑翁より少しく前に易簀した、紀州の倉田績(佐藤一齋の門人)、大正七年春物故した藤澤南岳、七十三歳の老齡で最近に歿した近藤元

粹等の老學究は、或は强く或は弱く、殆ど申合せた如うに三好屋自殺説を否定し、乃至海外遁竄説を主張されたのも不思議である。それで僕は舊稿「大鹽中齋」(舊著「三都收む)中「中齋の死狀に就きて」の一文を草した後、出來るだけ彼れの遁竄説を保證する材料を蒐集せんと力めたが、六甲山中にその遺跡は無いかといふことは、其の間絶えず僕の腦裡に往來した主調的暗示であつたのである。

六　果し無きラビリンス

これはツイ近頃の事であるが、御影常願寺住職東海夫氏は怎麽事を話して呉れた「私の亡友に高島小十郎と名ふ一寸風變りの老人があつた。晩年書を志して、所謂八十の手習ひを初めたが、技は年々に進んで一廉の能筆となつたのに、本人には幾ら書いても物足らぬ心地がするので、書いては破り棄て、書いては破り棄て、死ぬる間際まで、書いたものをスッカリ燒き棄てた人である。此の老人が曾て六甲山

中で白髪童顔の一異人に遇つた。年を訊けば百五歳とか、大鹽中齋の門人なにがしだと應へたさうである。勿論高島老人は其の名を言つてゐたが、惜しいことには忘れて了つた。何でも歴史の上では處刑されたことになつてゐるので、世に歴史といふものほど當にならぬものはない。などゝも老人は語つてゐた云々」

僕は斯の話を聞いた其時の直感は、その異人こそ中齋其人ではなかつたかと思はしめた。猶、此話に就いて憶い出したのは、鑛毒事件で有名な故田中正三翁が、矢張り六甲山中で、中齋に遇つた知人某に就きての直話である。僕が上州へ旅つた時、其話を聞いたのは、今から二十餘年前であるが、その正三翁の實弟某が當時中齋の隱れ家三好屋の跡だといふ靭中通三丁目南側、今の靱尋常小學校前を一丁半程東へ入つた、見越の松が往來を覗く塀付の家に住んでゐたのも、正三翁と中齋との間に何か因緣があつたやうに思はれる。或は正三翁の知人某といふのは、御影の高島老人の事なのではあるまいか。

それに六甲山中には人が十四五人も這入れるやうな洞窟が二ヶ所もあると云ふ事は僕が幼時、母に伴はれて有馬へ行つた途すがら、六甲越しの駕籠舁から聞いたところである。

中齋一味の者が、其處に遁竄してゐたか否かは疑問としても、其處に幾多の人が住んでゐた形跡のあつたことは、爾來數々耳にした。中齋一行も或は斯の山に入り、天壽を全ふしたものか、それとも赤坂落城後の楠公が、正慶元年の秋、忽然千早城頭に菊水の旗を飜す一年餘りの間の如うに、捲土重來の壯圖に肝膽を碎いてみたが、到底事の爲すべからざるを慮つて、一同自殺したものか。果して然らば高島老人の邂逅したと云ふ異人こそ、彼の赤穗義士に對する天野屋利兵衛、清十郎に對するお夏のそれの如うに、何かの動機から獨り殘存へて、恩師先輩の靈を弔へるものではなかつたかなど、想像は想像を生んで果し無き迷宮に彷徨ふた揚句、僕は終に身ら六甲山中を踏破し、草の根を分けても其の異人の跡をつき止めたいと思つたが、機緣の熟せ

ざるものがあつたのか、不思議と現實の繫縛に幾度か探檢の壯擧を妨げられて、徒らに此處三四年間を一種の狂躁的憧憬れの種に過して了つたのである。

七　人身肥料と國家肥料

僕が奇しき幻像を見てから一週間ばかり後の早朝であつた。北攝三田町の近在から易を學びに來てゐるYといふ禪病的親戀患者で而も哲學的文學青年が、暫く來なかつたので怎うしたのかと案じてゐたら、瓢乎と顏を見せて、四方八方の話に耽つて居るうちに、僕の机上に在つた蠹魚臭い二三の墓書に目を注けて、

『先生！墓は家屋の根元ださうですが隨分古からあつたでせうね。』

『何でも古は風葬といつて木に懸けて鳥の啄くに任せ、水葬といつて河中に投じ、土葬といつても土に埋めたきり、火葬といつても火に燒いたきりであつたらしいが蔽ふた土の上や岩窠中に投じた上に石を置いたり棒を打つたのが、墓のそも〳〵の

如うに思へるね。易には「古之葬者、厚衣之以薪葬之中野不封不樹喪期无數後世聖人易之以棺槨云云」とある。論ふまでもなく易は原始人の直觀的天文學であり象徵的自然科學であると同時に、命數哲理の表現であるが、大陽崇拜から祭天の習俗に根ざしてゐるのも事實だよ。日本の○○が易道の心譯だと云ふ意も其處にあるのだ。易理を道德化した儒敎が孝道爲本を說いて、重葬久喪を主張したのは死者に厚き結果は生者の上に平和を齎し、可見界の安穩は不可見界を崇める心の反射的作用であるとの信仰からだが、一つは當時の支那人が餘りに殘酷性を帶びてゐたからだらうよ。それに人間の靈魂は天の一部であつて死すれば元の天に還るは勿論、生前猶且天に支配を受くると云ふ原始高原民族の敬天思想が祖先崇拜の根源であるが、今日我國の佛敎徒のパン種になつてゐるのは爾うした祖先崇拜心であるのだ。佛敎の生命たる因果說とても要するに易理の象徵ではあるが、未來を期待するところに生命のある事他力義と、過去も現在もありやしない初め無き初めから終

り無き終りまで、我より外に何も無いと覺る自力義が佛敎の陰陽兩義であつて、佛の苦集滅道は易の四象であるが其の宗敎的生命は厭世的香味に存して、復古的の神道とは聊か趣を異にしてゐよる。祖先崇拜思想の儒道神道の敬天思想に基くことは勿論である。』

『すると今日の佛敎徒は解行相全では無く解行不相全ですかね。』

『多年金石學に沒頭して居る友人K君は、聖德太子以來德川期までの一千年間に、儒敎に關する金石文が無いと說つてるが、打明けて云ふと聖德太子の所謂「篤敬三寶」なるものは神儒佛の三敎で、佛敎の所謂佛法僧では無く、佛敎の佛法僧を神儒佛と云ふ佛法僧に擴大されたのだ。隱つて推古以來足利末期までの一千年間の佛敎なるものは、神儒二敎を含んだ佛敎であるから、儒道の金石文の無いのが當然なのだ。』

『すると弘法に至つて具體化した兩部神道なるものは、遠く聖德太子に根ざしてゐ

るのですかね。』

『それ以前佛敎が支那に入つて儒敎と混合した事が、我國の兩部神道說の起る遠因だといふべきだよ。しかし孔子によつて生つた儒道は孔子と共に世を逝つて、枯骨空しく存し、大迦葉等が佛心を文字化して形骸に墮せしめた如うに、子夏の徒が儒敎を文字化して形式に墮せしめてより、虛禮虛式の爲に產を傾け身を誤まるものもあれば、三年間の父の喪が明くと兄が死んで又三年、母が死んで更に三年の喪、惡くすると一生涯を喪期に費さねばならぬ爲に、產業は衰へ國は亡ぶるに至つて楊朱の薄葬說が生つたのだが、支那人は古來楊朱の謂ふやうな享樂主義、利己主義であつて、食、色以外何も無い。漢文は淫文であり支那人は春畫的人物だが、物欲の凝塊でもある。今の人間でも死屍を肥料に用ゐてゐるのだ。地質の瘦せてゐる割合に作物の出來が好いのも人肥のお蔭ぢやと云ふことだ。』

『然し寢棺に入れて土を盛り上げ、木や石の墓標を建てゝるぢやありませんか。稀

には寺の縁の下などにつき込んだのを見たこともありますが……』

『そら秦始皇の陵や明陵其他の王者尊族なり偉人傑物の墳墓を見る人が墓を重んずるかゝ窺はれるし、日本の神社一覽表を見ると、日本人は悉く神社に化る爲に世に出て來るのかと思はれる如くに、支那の金石文、拓本集などを繙くと、支那人は墓誌銘に化る爲に生れるかに思はれるが、大多數の國民は、埋めた死體が棺と共に完全に腐つて地に浸み込んで了つた頃に、發掘して殘つた骨を壺に入れて田畑の間に設けられた共同納骨所へ納めて置くのだ。そしてその納骨所が骨で一杯になると、火を點けて骨ぐち燒いて了ふのだ。燒いた灰は滿遍に分つて畑へ撒布することにしてゐるのだ。』

『流石豚の本場だけに無駄が無いわけですね。』

『左樣、やがて支那以外の國は皆支那の肥料に化つて了ふだらうよ』

八　釋迦も御存知無き阿彌陀佛

『國それ自體が持餘してゐる我國などは、結究其の方が助かるでせうよ。併し我國の墓は何時代から創建まつたのでせう？考古學者や地質學者は新石器時代から古墳時代に接續してゐると云つてゐますが……』

『ナーニ石器にもせよ古墳にもせよ、古い物ほど手近にある筈だ。宛轉宛轉復宛轉車輪の如き宇宙間には、一切事物が旋轉する。最古の時代は最新の時代として刻々眼前に旋現はれ、最古の地層は最上に轉還して來るからだ。目に見ゆるものしか見得ぬ考古學者、地質學者等が、最新の層だとのみ思つてゐる上層は、其の實最も古い層たることは論ふまでもない。』

『ぢや最古の墓も、往來に轉がつてゐる譯ですね。』

『左樣！お互は日々最古の墓碑墓木の缺片だの、原始時代の人間の遺骸の化石や化

砂石を踏んだり、蹴つたりしてゐるのだが、神が死んだので葬式をしてやつたとか云つて下らない著書を刊てたり、世界的大戰後、白骨の山を攀ぢて見果もつかぬ野獨髏を見渡して、神の不信任を決議する如うな連中には分らないよ。神は遠き昔に脱け去せて、神殿は疾くの昔から狐狸の巣窟と化つて居のに氣の注かない代物だからね。』

『それはそれとして舊事記とか名ふ紙墳に、「饒速日尊、神去玉ふ時、天羽々矢及び神衣帶手貫の三物を、登美白庭の邑に葬歛めて、これを以て墓とす」とあるのが我國の墓の始めぢやとか云ひますね。僞書中の僞書の記事ですから勿論問題にはなりませんが……』

『僞書と云へば一切の書籍は悉く僞書なのだ。自分の行つた事すら、日が經つと忘れて了ふ。僕などは記憶が惡いから尻から〳〵忘れて了ふ。それに幾百千萬年前に人の爲た事が分らう道理が無いぢやないか。所謂「一雨所潤、而所草木、各有差別」で、同一の事實を多くの人が觀てもおの〳〵の主觀に憑つてそれ〳〵に異つて

觀える筈だ。各其の顏の異る如くに、其の觀るところも異るからである。だから何人の言說と雖も、決して事實其物の標準とはならない、謂はば語る其の人、記す其の人の主觀的反映に過ぎないよ。生きてゐる人間の評傳を著くのが難しいと云ふのも、聞く人毎に批判が異るからだ。或る歷史家が「日本歷史の書き訂しにかゝつてゐる」と云ふから「歷史は一人一人異つてゐる筈だから、誰が書いても書き訂しになるのだよ」と應つてやつたこともある。無論それは歷史ばかりでは無い、事物の發見でもさうなのだ。亞米利加を發見したのはコロンブスばかりで無く、君でも亞米利加へ初めて行けば亞米利加を發見したのだし、樺太の發見者は近藤重藏ばかりでは無く、何百年後の人間が樺太へ初めて行つても矢張り其の人の發見なのだ、全體發見なんていふものは發見者それ自身の發見で他の關つたことでは無い、總ての人の批判の總てが獨斷であるのと同樣だ。又獨斷なるが故に批判の價値があるのだ。獨斷が混斷に墜つては終焉である。併し、縱令總ての人が知らずにゐることを

初めて發見したといつた所で、水が低きに流れ、火が燃ゆるものたる限り、畢竟するに總ての人が忘れてゐたのを、先に思ひ出しただけの事である。然し、眞理を發見したなどゝ誇ふ者は、總ての人に先つて間違へてゐる奴なのだ。

『眞實です。何か新しい發見をしたといふので博士になつた翌日、其說が既に古い說に化るは勿論、甚だ間違つた說であることが發見されもするさうですからね。』

『だから博士號一日制の必要が生るのだ。實際又華族一代制よりも、博士號一日制の方が眞理だからなあ。』

『其事は爾うと、年が經つほど古い事が分ると言ひますが、それだけ近い事が分らなくなるやうですね。』

『それや山中の人は山を出で山に遠かる程、山の全形が分る如うでも、其の分つた全形の價値が、手に採つて見る小石一つにも及ばないことがあるでな。孔子は堯舜以前の事は書かなかつたのに、司馬遷は五帝に、班固は三皇に遡ると云つた鹽梅

式に、後の學者ほど以前の事に通じてゐるかに思へるが、虛僞誤謬の雲霧がかゝつて眞相は年毎に分らなくなるのだ。今日の考古學者や地質學者はまだ五十億年位以前までしか遡つてゐないのに、本當の事は一つも無い。又百億年、億々年と遡つて行つた日にや、怎れだけ嘘で固まるか分りやしないよ。創世記は新世記、神代記は新代記だ。創世記のエホバ神は天地創造の神よりも思想が幼稚であり、十劫正覺の阿彌陀佛を二千五百年前に死んだお釋迦さんが御存知無い譯さ。はゝゝゝ』

九　亂魂歸魔

『併し「千年前の事が本當に分る人なら千年後の事も分らなければならない。眞の歷史家は豫言者であらねばならぬ。否、豫言者のみが歷史家だ」と何日か先生は言はれましたが、龍樹の出現を豫言した釋尊や、蒙古來を豫言した日蓮などは眞の歷史家でせうね。』

『如何に大乘是佛說者とは云へ、楞伽經に見れた釋尊が龍樹以前の人であるとか、立正安國論を元寇以前の著作だと信ふのは、無量壽經を阿彌陀經より以前の經だと云ふ以上の愚であり、舊事記を聖德太子の作だと信ふ以奥にお芽出度い譯ではあるが、日が東に出でゝ西に沒する限り、一度地上に現はれた人間は又現はれるに決まつてゐるし、一度來た外寇は更に來るに決まつてゐるから、君の云ふ釋迦や日蓮の豫言などは、今から百年經つと今日の世界の全人類は、九分九厘まで滅んで了ふと斷ふ豫言よりも外れつこの無い容易い豫言なのだ。』

『成程、耶蘇はモーゼの再來、日蓮は上行菩薩の再來である如うに、龍樹は釋尊自身の復活であるとしましても、蒙古は弘安以前に我國へ寇しに來たことはないぢやありませんか。』

『來た事が無けれや今だに澤山な捕虜が居りさうなことが無い、鎌倉當時の蒙古は悉く海底の藻屑と化つたのだから……現にお互の相貌が蒙古種らしいぢやないか。』

『イヤ墓の話が豫言のプロペラーで飛んだ遠方へ飛びましたね。』

『ナーニ墓は十萬億土飛行機だよ。』

『はゝゝゝ、併し今の我國には確めた過去の事實が同時に環の如く繰返さるゝ將來の時代に對する默示となる如うな、眞の歷史家なるものは見たくも在ませんなあ。』

『それや過去の事蹟に就ては親しく目擊してゐたのかと思はれる程の明斷を以て語る歷史家はあつても、それが來らんとする時代を指導する光明とならない我國に彼の希伯來のイザヤやエレミヤの樣な、豫言者を攝ねる程の識見ある歷史家が一人でも在つたならば、理性の發達と科學の進步とが、不合理な敎理や習慣の一切を拭ひ去らんとしてゐる今日、よもや大正十年の五月には「世界の立替」なるものが始まつて、日本人の三分ノ二は死んで了ふとか、危邊十里四方の外は、火の海、血の海、泥海に化つて了ふと云ふ如うな、彼の鎭魂歸神、では無い亂魂歸魔敎の僞豫言に釣り込まれて、軍職を退いたり、敎職を拋つたり、醫者を廢めたり、會社を解散

してまで、エザワザ邊鄙な山奥へ行つて狐が憑いたり、子供を殺したり、女房を見喪ふたり、夫を見違ふたりする人間もあるまいさ。』

『しかし歸魔教のお筆先には、日清日露の戰役が其の前から豫言されてゐたとか云ふぢやありませんか。』

『しかし戰役前、誰もさうした豫言を聞いたものゝないのは、實に非不思議中の不思議ではないか。やがて又先度の歐洲大亂を豫言する事だらうよ。』

『しかし大正十年の世界破壞が、自教の破壞になつたのが不思議ですね。』

『そら嘘を吐いて對者が信ずると、欺いた事柄が己れに取つての本當になるものだ。何日何日に地球が冷却して了ふと欺いたら、必度其の日に己れの身體が冷却するし、太陽の光りが無くなると欺したら、自分の目が盲がつて了ふ。だから君でも死にたかつたら、貴方は何月何日必度死ぬると誰かを欺くが可い。必ず其の日に、自分が死ぬることが能きるよ。火事に遭ひたかつたら、君家は何日幾日必ず火事に遭ふと

斷つて誰かを信じさせたら、其日に必ず自分家が燒けるに決まつてゐるよ。病氣でも無いのに病氣だと欺つて、奉職先を斷はつたり、出席を斷はつたり、面會を避けても對者が信じ無ければ可いが、萬一信じたら、不思議に病氣にかゝるからな。』

『本人直接で無くてもですか。』

『間接に欺瞞のなら對者が信じなくたつて靈驗顯著なるものだ。誰某は詐僞師だと他に告ぐれば對者が信じなくとも其事は必度自分の事になるし、何々君は何日か他に殺されるよとさへ誰かに語つてさへ置けば、必度何日か自分が他に殺されるよ。疑はしくば、僕を對者に試して見たまへ。』

『爾う告はれると何だか氣持が惡くて、試る氣になりませんね。』

『ぢや反對に彼の人は必度神に祐けが享けられる。誰某は佛になれるといつたやうな好い豫言さへして居れば安心ぢやないか。勿論さう云ふ人は既うチャンと神の冥助を享けて居る人、佛に成つてゐる人だからね。』

『イヤ解りました。他の陰口をいつたり他の幸福を妬んだり他の不幸を祈る人間の不憫さが解りました。況してそれを賣り物にする迷信屋をやです。それにしても年金で食つてゐる退職軍人や金を有つて遊んでゐる人間が兎角、あゝした迷信にかぶれ易いのは如何いふ譯でせう？。』

『年金にもせよ、泡吹錢にもせよ、遊んでゐても食へるだけの金が手に入ると云ふ事は、最早働くべき能力が失はれて何を行つても駄目である證據だから、何もしないで遊んで居りさへすればよいのだが、何もしないで遊んで居るといふ事は心身の沈默で、普通大抵の修業では能きやしないさ。それに彼等は働くことばかり稽古して、遊ぶ修業をしたこともないからなあ。『人如要閑必先學懶若不懶定不得閑也』と古人も曰つてゐる。』

『私共は適當な職業が得られない爲に、據ろなく遊んでゐるのですが、其の癖端書一枚書く遑も無いほど忙しいですがね。』

『そら無職業の者に取つては、衣服を着ることも、飲食ふことも職業と爲つて、餘暇と云ふものが無くなるからだ。然し餘暇が無いといふことが無くなつて了へば、それが游びといふものだよ。』

『すると懶を學んだことの無いものは、懶つてゐると、ロクな事は仕出かさないのも無理は無いですね。』

『だが守錢奴や攻錢奴が病氣である如うに、あゝした迷信にかぶれる人間も謂はゞ一種の病人なのだ。ナニ攻錢奴とは何かつて、錢を奪られまいと夜の目も寢ずに金の番をする人間が守錢奴なら、夜の目も寢ずに金を奪らうとする泥棒は攻錢奴ぢやないかね。』

『すると歸魔教々徒などは白晝の攻錢奴でせうねえ。』

『ナーニ彼教や其麽氣の利いた教ぢやないのだ。電彩目眩ゆき都會で生れて都會に育つた不良老年が、山奥へ行つてランプを見て珍らしがり、無線電燈だとか何とか

叫つて騒ぎ立つて捻繰り廻してゐる機みに取落して傍の紙反古に火が點いたのが、風まんが惡かつた爲に大火となつて、遂に官林に延燒して行つたので、泣き喚いてゐる如うな可愛想な代物だからな。』

『しかし該敎の桃山御陵の摸倣墓や、賢所の模倣殿は其の筋から取毀されたさうですね。』

『それやさうだらう。彼麼僞陵や贋殿を其儘にして置くと、後世歷史家、考證家がどんなスカタンな事を云ひ出ずか分りやしないからね。昨日、中河内西郡村の木村長門守の墓へ詣つて、「木村長門守奮戰地、大正五年八月」と記した碑文を見た時、長門守の戰死は大正五年九月に相違無いと、歷史家、考證家の類が、其碑に齒嚙付いて一生懸命に拓本を取つてゐる何百年か後の光景が見えるやうに思へたからね。』

『それに近頃は金石文の僞造が巧みになつてゐるさうですし、千年位の時代は一夜でつくさうですね。殊に泡吹錢を獲て成金になつた奴は、餘り古くも無い先祖の墓

にウンと古い時代を附して古い年號を入れ舊冢らしく粧ふことが流行つてゐるとか聞きましたが……。』

『だが併し良寛だの、いや桃水だの、いや親鸞だの、西行だのと、怎う云ふ宿怨があるのかは知らないが、生前すら世を遁れ人を避けてゐた爾うした人間の髑髏を掘繰り出して、夜店や朝市に競賣りして不勞利得に舌を出したり、舌鼓を打つ事を、朝飯前の仕事にしてゐる食骨鬼の事を思へば、其麼のは寧ろ無邪氣で可愛いではないか。』

一〇　潜敎と密敎

『無邪氣と云へば紙碑も古いほど無邪氣らしいやうですね。』

云ひつゝY君は、風呂敷包から易經を取出した。

『眞の無邪氣は最も新しい筈のものだ。古いものほど新しいのは古いものほど無邪

氣だからだ。然し無邪氣は無寫記で、繪に寫したり文字に記されるといふことは有寫記卽ち有邪氣だよ。無呪が口呪や文呪と變つて御利益が喪はれ、無陀羅尼が音陀羅尼や字陀羅尼に化つてから生命が亡びたからなあ。』

『それにしても分裂と鬪爭で恐ろしい生命の跳躍を齎し、宛ら暗中に利刄の飛び交はせるかの如うな易經とは反對に、涅槃經位一切を攝取して心の底に沈着かせ、何となく人をしんみりさせるものは御座いませんね。』

更に風呂敷包みから、縮刷涅槃經を取出してY君は曰ふた。

「何れの經よりも懷かしく物佗びしく悲しくこそはんべれ」と慈鎭和尙も曰つてゐるが、要するに華嚴の嶺より落下し來つた諸大藏は、悉く涙ぐましい涅槃の磵底に葬られて了ふのだよ。易と老子の對照の如うに、火經に對する水經だ。乾經たる華嚴に對する坤經だから……

『併し、佛在世八十年の後、拘尸那城沙羅雙樹の間に於て入滅した時、唯舍利を留

めて人天の福田としてから舍利信仰が生り舍利信仰は窣堵婆を生み、窣堵婆は塔を生み、塔は七堂伽藍を生んだかも知れませんが、今日の慕なるものは支那の摸倣ださうですね。』

『そら位牌からして支那の木主だからね。それに密敎の儀軌なるものが印度の波羅門や、波斯の拜火敎の儀式が基調となつてゐることは言ふまでも無いが、禪宗は更なり、遡つて律宗、天台、法相等の儀式と等しく重要なる政治機關であつて、大抵支那の模倣で儒敎は勿論道敎の儀式なども加はつてゐるのだ。』

『併し、涅槃經の釋迦の遺骸を荼毘に附した當時の叙述は、現在我國に行つてゐる火葬の光景酷似ではありませんか。』

『君の觀た涅槃經は漢譯では無いかね。縱令サンスクリットの其經だつて、釋迦に緣遠いことは、羅甸語の聖書と基督との距離以上の距離がある。全體大乘敎典は印度の自然哲學と支那の人世哲學とのコーラスされたレーデドラマとでも云ふべきも

のだよ。』
『墓の話が何處かへ行つて了ひましたね。』
『何處へも行きやしないさ。現在茲に二基對ひ合つてるぢやないか。』
『成程、我々は生きた五輪塔の如うなものですな。』
『左樣！佇ては燈籠、坐れば輪塔、歩く姿は率堵婆に似たりだよ。』
『はゝゝゝ。』

一　アリストファーネス

實のところ、僕は此の青年に對すると、毎時も揶揄氣分になる。何と無く緊張した心が弛んで洒落の一つも言ひたくなる。ヨタリストでもユーモリストでも無いのだが、顔、姿勢から物の言ひぶりだけが、眞面目過ぎるほど眞面目らしいのが、何と無く可笑しく感ぜられるのである。同人の一人が『莊嚴なる不良青年』と綽名したのも、爾

うした意味からだらうと思はれる。鉛のドンキホテオだの、生眞面目な茶目だのと、他から冷評されてもゐるらしい。根が羊の如うな溫順しい好々漢であるだけに、豪强らしい外貌の保護色が與へられてゐるのであるのに、動もすると外貌を濫用して對者を威嚇してかゝる穉氣がある。虎の皮を被つて狐狸を嚇す羊の類であらう。然し緬羊の皮を被つて虎狼の心を抱く人間の多い今日、何處までも本質の眞純さを喪はぬのは珍しい。其處に喜劇詩人といつた面影があつて、何故か僕には彼の雲の劇の作者、古代希臘のアリストファーネスが聯想される。

元來人が右といへば左、川といへば山と反る所謂天邪鬼であるが、僕の言ふことは喜んで聞いて呉れる。否、兎角狐狸妖怪の言を聞きたがるが、なか〳〵人間の言ふことを聞かない人間が多いから、天邪鬼だけに聞くのであらう。さりとて內界の底奥深く祕められて、自己自身も知らずにゐる生命の糸を引摺出して呉れる男ではない。人は誰しも眞劍に他と對話をしてゐるうちに、ピッタリ同感二者一體となつた時、自己

自身の言に驚異を感ずることもあれば、感謝することもある筈だ。勿論それは對者の賜物である。言葉は自分の言葉でも、對者によつて手繰り出された自己の内界の妙音である。尤も爾うした對者の内部にも求道心が燃え立つてゐるのである。縱令外面は呑氣らしく見えても、心が毎時も懺悔の涙に淨められ、煩悶苦惱の烈火に然えて、絶えず救ひの水を求め求めしてゐる人に違ひない。而もそれが知らずして自らを救ひ併せて他を救ふのである。人は眞に求むるものゝ爲に救はれる。己れの一切を求めて己まぬ對者に出會はさねば永遠に救ひは來ない。釋迦の說法も釋迦の力でなく聞者の力である。釋迦も勝鬘夫人や韋提華夫人に救はれた。人は誰しも眞の一人の聞者が得らるれば佛になれる。其の一人こそ基督の所謂「地の果てまでの證人」である。「此の聲は地の果てまでも及ぶべし」と耶蘇の云つたのもマグダラのマリヤを得た證人を得たからであらうと思はれる。又、眞に一人が一人に觸れたならば、全地の人を動かし得るものだ。

言ふまでも無く眞の聞者にはアトラクションされる謙虛さがある。それが其の人の磁力であつて、他との親和力は其處から生る。勿論Y君にはさうした所は見當らない。といつて他を沈默せしめる如うな心劍さはもとより心微理させる涙り氣もなく、寧ろ駄辯を振ふべく餘儀なくさせる一種の斥力を有つてゐる。或はそれが揶揄氣味を惹起させるのかも知れない。然し其處に却つてY君の内面に云ひ知れない悲哀の潛在が語られてゐるかにも思はれる。もと〳〵偏鄙な田舍の富家に生れて親のお蔭でヌク〳〵と大きくなつて、何等實際的の苦勞を知らぬ氣まゝれ者。蝙蝠すら無き里で羽場を利かしてゐた極樂蜻蛉であつただけに、一躍理想の王國に突進せばやと、猪突的に社會の實際舞臺に乘り出して、一蹴忽ち奈落のドン底に陷り、生活上の不安と家庭的紛糾に渦卷かれた結果、多年の妄想一時に覺來ると共に大なる煩悶を育んで來たらしい。

一二　許由と白幽

Y君は言葉を繼ぎ、

『話は轉じますが、洛北白河山に「夜船閑話」に出てゐる白幽子の墓がありますね。私は白隱の假説した幽靈人物かと思つてゐましたが、昔はあんな仙人見た如うな男が實在してゐたのですかいな。』

突拍子な男だけに飛んでも無い者を擔ぎ出した。

『彼翁史記の問題は、「我嘗登白河山在山中白幽子冢」と、司馬遷なら片付けて了ふだらうよ。』

『成程、白幽は許由の生れ代りかも知れませんね。縱令居つたにしましても、白隱は事實白幽に會つたのでせうか。墓に彫つてある白幽の沒年は、白隱が訪ねて行つたと記ふ寶永第七庚寅孟正中浣より二十年も以前ですが……。』

『だが聖德太子が片岡山で達磨に遭はれ、弘法大師が礒長の御廟で太子に御眼にかゝり、徑山の無準が菅公に會つたことを思へば、沒後二十年位經つたつて、會へないこともあるまいぢやないか。はゝゝゝ。』

『串戲放つて白幽や一體何者だつたのでせう?。』

『何者つて?易者ぢやないか、机の上に金剛頂經と名ふ火經と老子と稱ふ水經と中庸と題ふ和合經の三經、卽ち假、空、中の觀經が載つかつてゐて、白隱に九轉還丹の秘訣といふ易の一解説を諭へたのぢやないかね。』

『すると吉凶悔吝を豫測して災害を未發に防ぐことの能きる易は療病法ともなる譯ですかね。』

『それや大國を治めることの能きる才幹力量を、自己一身の養生に注げば天壽を全ふ能きるからなあ。』

一三　長持の牛

『其話はさうと先生!阪急電車花屋敷と寶塚との間に、錢屋五兵衞の遺跡があるさうですし、池田の對向の細川村に紫式部の墓があり、又伊丹在の西昆陽に高師直の墓がありますが、何だか米櫃に蒲團でも入つてゐるやうな氣がしますね。』

延つ幕無しの墓物語。莫迦々々しいとは思ひつゝも何故か僕は惹きつけられて、

「長持を米櫃と思ふ鄙女中」とでも駄句りたいね。如何にも世間には因由も縁起も分らぬ墓がザラにある。君の云ふ長持の蒲團なら好いが、蒲團着て眠てゐる山々の枕許に、電車の目覺まし時計の消魂しい京都などは、元來墓地か市街か判らない土地柄だけに、其處等中に轉がつてゐるよ。それ彼の鳥部山に在る行基菩薩の墓、岡崎動物園の北横北入つた滿願寺と稱ふ日宗寺に在る俊寛僧都の墓、三條白川橋南入つて東へ入つた所に在る光秀の首塚、寺町綾小路上る淨久寺に在る重盛の墓、同佛光寺角聖光寺に在る大石良雄の母の墓、三條小橋南へ入る東側に在る畜生塚、同二條下る東側大雲院に在る石川五右衛門の墓、太秦廣隆寺四五丁西に在る常盤御前の墓、仁王門上る東側の中江藤樹の墓、嵯峨野往生院祇王寺の近くの丘に在る新田正行の首塚……』

『成程、幾らでも出て來るやうですね、チト西國の方面を伺ひたいものですね』

『西國方面では但馬豐岡西山の中腹に在る大石内藏之助女房お石の墓、讃州丸龜南條町玄養寺に在る田宮坊太郎の墓、高松と志度との往還に在る佐藤繼信の墓、備中成羽町近くの阿部村に在る山中幸盛の塔、草津村と云ふ廣島の近在北方山手の海藏寺に在る北條氏直の墓、久留米本町遍照院と稱ふ寺に在る高山彦九郎の墓、豐後大分の郊外に在る長曾我部信親の墓、但馬豐岡在の五庄村御所の谷に在る御鳥羽院第三の皇子雅成親王御墓、烏取市の興禪寺に在る渡邊數馬の墓、同く玄光寺に在る荒木又右衞門の墓、長崎は櫻の馬場から日見峠へ登る道に在る八百屋お七の墓……』

『近い所では？』

『近くでは神崎郡久々知村廣濟寺の近松門左衞門の墓、一心寺の那須與市の墓、千日前芦邊倶樂部に在る三勝半七の墓、北野大融寺にある淀君の墓など數へ來れば際限も無い、多くは奸事家の惡戯で、無根の事實をば面白く仕組んで書い院本に據つて、或は子女教訓の爲、或は土地繁昌の目的、若しくは神社佛閣の呼物として、勝

手に爾うした墓を建てることが、何時の時代にも行はれてゐるので、米櫃から浦團は怠か、牛でも飛び出したやうな不意打を喰ふことも無いではないが、しかし物には因縁と云ふものがあつて、袖振合ふも他生の縁、正確な歴史眼から縱令荒唐無稽と見えやうとも、某地に某人の墓があると云ふのには、其處に何等か隱れた因由が無くてはならぬものと僕は信ずるね。今日の畝傍山東北に在る神武陵は古事記所載の尾上の名に合はず、柴野栗山などは神武田の名に泥はれて場所を誤まつてゐるとか、柏原の桓武陵も初葬の陵は古の伏見城内であつたとか云ふし、歴代御陵を首め皇子、親王、内親王方の御墓にも場所違ひが尠からずあるとか云ふ事だが、僕は爾うした見地から場所違ひは一つも無いと思ふね、例へば堺乳守の臨江庵に曾我兄弟の墓がある、この庵は紹鷗の妹聟で、織田信長に仕へてゐた茶人今井宗久（千利久、津田宗達と共に天正三茶人と稱せられた）の邸跡を後人が寺にしたもので、こんな所に曾我兄弟の墓がある道理が無いと、よく〳〵調べて見ると、彼の十郎の

情婦、大磯の虎が建てたものであることが分つた。』

一四　破りて破れた女

『大磯の虎！それや不思議ですね。虎は十郎の菩提を弔ふ爲、花恥しき十九の年、信州善光寺に入つて尼になつたと聞きますが、それとも何時か關西の方へ來たことがあるのですかね。それに虎の墓はたしか大磯に在つたやうですせ。』

『大磯に在る虎の墓か、あれや俳界の奇人大江三千風の惡戯さ、鴫立澤の歌枕、虎御前と並べて祀つたのは、江口の君を濟度したほどの西行さん、同じ游女の虎と同宿まんざらお嫌でも……と云つた洒落なんだよ。恰度深草の元政上人を、仙臺公に殺された高尾の情夫石井常右衞門の後身だと傳ふ口碑の如きものだ、しかしそればかりではない。勿論三千風や元政は夢にも知らなかつた所であるが、假初にも西行と虎と合祀され、高尾と元政とが戀愛關係者の如うに揑造されるには、佛説の所謂

因縁因果此の兩男女の前世に、然うした契縁が結ばれてあり、今猶極樂淨土の蓮座に、孰れも二人仲善く暮らして居らぬものとも限らぬ。そんな事は三世を達觀し玉ふ佛の御眼でなければ觀徹し得ないところだが、稀には僕等の凡眼で、意外な因縁の連鎖を發見し得ることもあるのだよ、處が堺邊に來たのは、勿論尼になつた後の事で、何でも九十九王子巡りとかに出て、四天王寺から熊野王子に詣づる途次、彼の邊りの風景を愛して、姑し脚を留めた頃、曾我兄弟の靈を祭つたのが、彼の墓の因由であるらしい。』

『イヤ分りました。しかし分らぬのは虎の如うな世間から賤しめられる游女が建てた情人の墓はありますが、才媛だの、閨秀作家だのと、世に賞め讃へられてゐる何〻式部とかの建てた墓は一つも無い如うですね、其の癖何れも情人は多かつた如うですが……』

『それや式部などゝいふものは、何時の世でもロクなものはありやしないさ、それ

に男女ともに文筆に携觸るものは虚榮心の凝塊だ、而も同類相引いてます〳〵其の禍害を深くするものだが、殊に文藝に憧憬れる男女と來ては、悉く賣名的色情狂だからね。それに女流歌人とか云ふものは亂倫汚行を鼻先にブラ下げたがる動肉で人間としては取扱へないよ。』

『それで女が表に出者張つて文句を並べ出すと世が末になるのですかいな。』

『それや天下泰平の極は天下大亂のそも〳〵だからね。男が表なら裏であるべき所に女の價値が存するのに、女が男の上に乘り出して裏が面の面になつたのぢや、腹を反した魚同様さ、紫式部、清少納言其他さうした代物の多かつたことは平安朝の滅ぶる前兆だつたぢやないか、取分け和泉式部と來ては淫名、歌名を凌ぐ强か者たるは勿論、賣名心の凝塊だつたから、墓も數へきれぬ程ある。一寸考へても、關西線木津驛の重癰首洗ひ井戸の近くにある。泉南加太岬の近くにもある。京都新京極の誠心院といふ眞言寺にもあるのは誰知らぬ者もあるまいが。房州那古の那古寺に

もあるし、前の細川村もだし。詳しく調べたら情夫の數より多いかも知れないよ。』
『其墓や何も情夫が建てた譯でもありますまいからね。』
『勿論さ。墓でも廟でも皆本人が建てるのだよ。何が阿呆らしいものか。嘗て或人が「加古の敎信沙彌は餘り他に擔がれやしないのに、敎信沙彌を擔いだ善信沙彌卽ち親鸞聖人は、何故彼麼に大勢から擔がれるのでせう？」と質くから、「ナーニ大勢が親鸞を擔ぐのではなく、親鸞が大勢に擔がせたのさ」と言下に應へてやつたことがあるが、眞宗とは親鸞の戒名であり本願寺とは親鸞の墓であることは言ふまでも無いが孰れも親鸞によつて拵へられてゐるぢやないか。それに墓の內容を見ると親鸞が彌陀に救はれたのか、彌陀が親鸞に救はれるのか分らないではないか。』
『イヤ實際です。大師堂が傲然と眞ン中に平太り込んでる傍に、彌陀堂が小さくなつて傍にへばりついて居りますし、裝飾から何から總てに於て彌陀堂は大師堂の餘りものを頂戴してゐるかに思はれますね。』

『何せ燒けたら先づ大師堂から建てゝ、阿彌陀堂は金が餘つたら御慈悲で建てゝ貰ふのだからね。』
『併し、智恩院などの阿彌陀堂は法然堂の蔭にかくれて一寸分らないぢやありませんか。』
『それとても法然の爲たことで後嗣や信徒の知つたことでは無いのだ。法然が善導を擔いだ如うに、親鸞が聖德太子を觀世音と拜したり、和國の彌陀と讃へたり、法然聖人を大勢至と崇めるは愚か、我が女房をさへ觀世音と拜して女房に自分を觀世音と拜ましたりしたことが、子孫や末世の信者が厭でも親鸞を彌陀以上に擔がねばならぬやうになつたのぢやでな。全體永久に多くの人間に己れの拵へた墓の守護をさせるのが、高僧と云ふ極惡人だからなあ。』

一五　紛骨誤廟

『然し、御話の如うに墓は皆本人が建てたとしますと、伊豫と土佐との國境、久萬山に在る新田義興の墓など實に可笑しいですね。義興は今の東京府と神奈川縣との境、六郷の渡船場（當時矢口の渡と稱つた）で、頓兵衛と稱ふ船頭の爲に船を沈められて溺死させられたと傳ふではありませんか。同地方に癩病患者の多いのは義興の亡靈が祟つた所爲だとさへ傳つてますよ。』

『それや衣川で討死した義經の墓が南清に在るとか云ふし、若州小濱の出生で江戸傳馬町の牢屋で毛を拔かれ生瓜を剝がされたりして、無殘の牢死を遂げたとかで淺草海禪寺に葬られたと云ふ梅田雲濱の墓が京都鳥部山、妙見寺近くの寺に在るし二位尼が抱きまゐらせて、「波の底にも都の侍るぞ」と西海に投じ玉ふたと傳ふ安德天皇の參考御陵が、鳥取在の岡增に在るばかりで無く、大坂城で自殺した秀頼が薩摩へ落ちたと傳ふ如うに、衷向き何處其處で死んだと云ふことにして、秘かに他所へ遁れて世を送つたと云ふことも、戰國時代には有勝の事であるし、又敗殘の遺

族、遺臣、若しくは同僚、後輩が、主君、先輩、同志等の靈を弔ふ爲に、何がな對者の遺品を埋めて自己の鄕里、或は亡命地、流謫地に密かに墳墓を建てたりもした。さうでなくとも、昔は平素崇拜せる人物が亡くなると、對者の首なり髮なり爪なり衣服の裂ッ端でも貰ひ受けて、中には偷み出してまで、墓碑を建てる者もあつた。殊に宗教的信仰の對象になつてゐた人間などが亡くなると、遺骨の始末が八釜しい事であつた。ヌク〳〵の死體に何者の所爲とも知らず、一筋の陰毛すら殘つてゐなかつたりもした。佛骨の奪取合ひから印度全土の大戰亂が生りかけたと傳ふではないか。しかし分骨御廟は紛骨誤廟で、何々大師入定地とか、何々聖人本廟とか云つて、日夕參詣者の群る墓碑ほど、得て馬の骨すら埋んでゐないものだよ。』

『親鸞の遺骨なども、善念と覺惠の相續爭ひの爲に、紛失して了つたさうですね。それに勝尾寺と智恩院と光明寺とが、今に法然の死所爭ひを行つてるやうですね。』

『だが法然は勝尾寺で死んだことは確實だよ。』

『それには何か考證でもあるのですか。』
『考證どころか心證があるのだ。聞き玉へ、彼寺の坊主の日〳〵が面白い。』

一六　法然上人の嶽門塚

『ナーニ法然坊は此寺で死によつたのぢや。死ぬる四年前に流罪は勅免されてゐたけれども、「よろしく畿の内に居住して、洛中に往還する事なかるべし云々」の但し書附で、爲に京都へ歸ることは能きなかつたのやでな。それに叡山の僧徒が歸つてうせたら叩き延ばして了ふと、手具脛引いて待設けてゐたので、當山の厄介になつてゐたのぢやが、四ヶ年經つて建暦二年正月たう〳〵此寺で死によつたのや、初めは西谷に草庵を結んでゐたのやが、後、勝如上人の居られた二階堂（今は場所は變つてゐる）に移つて其堂で死んだのぢや。ナーニ建暦元年十二月二十日歸洛して大谷の禪房に住居してゐたと、何、其說や後から喰付けた淨土宗の捏造說ぢや、

實際は此寺で死んだのを弟子共が死體を持つて歸つて粟生野の光阿彌陀佛のもとゝかで火葬に附して、此寺へ遺骨を持つて來たから墓を建てゝ遣つたのや、今でも後の山に殘つてゐる、粟生野に殘した遺骨は、其後山僧の來襲を恐れて嵯峨の二尊院へ夜中秘かに隱遷したと傳ふぢやないか。遺骨すら隱し廻らねばならぬのに生きて怎うして歸洛が能きるものかな。ナーニ死にがけに書いた一枚起請文が殘つてゐるかと、其麼物を實際死にがけに書いたか怎うかは疑問ぢやが、よしんば書いたにしたところで、此寺では居候の世迷言ぢや、殘して置かう道理も無い、淨土宗では其麼紙屑でも有難いのかも知らんけどなあ。ナンセ當山に傳はつてある記錄は內務省の記錄とキーチリ合うてるのやでな、事實とは合うてゐるかつて？知れた事ぢや。淨土宗の方から二度も訴訟を發しよつたが、勝てないのは、當山の記錄が事實と合つてる何よりの證據ぢやないか。併し淨土宗もいよ〳〵降伏たと見えて此間二階堂を買ひに來よつたよ、十五萬圓出すさかいと云うてな。阿呆らしい！二十萬圓でも賣

らへんと、劒もホロ〳〵に刻ねつけてこましたのや。はゝゝゝ」
得意滿面に斯う語り來つた勝尾寺の坊主の鼻をへし折つて呉れやうと、
『ぢや二十一萬圓で私が申し受けませう。』
突然僕が斯う應つたると、
『何や、あんたも淨土宗かな。』
坊主は眼を渾ふして僕の顏を注視めた
『イヤ淨土宗は十五萬圓より買はんのぢやありませんか。』
『……』
世に罵倒と云ふ言葉があるが、罵ることは對者を生かしこそすれ、怪我にも倒すことは能きやしないよ、讃殺す事は能きても罵殺する事は難しい、罵倒は讃倒のアイロニーであるのは勿論だ。人情は妙なもので、他が貶せば貶すほど、縱令其人が自分の仇敵であるとしても、被貶者に對して妙に同情心が生き上つて來る。掏兒でも捉へられ

て被害者に打擲されてゐると、見物は却つて掏兒に同情するではないか。といつて僕は何も法然上人を善導の「一心專念彌陀名號、行住座臥不問時節、久近念々不捨者、是名正定之業順彼佛願故」を掏つたと罵ふのでは無い。實際僕は勝尾寺の坊主の爾うした言から、急に法然上人に同情されたのだ、そして早速墓所へ詣らうとすると、後山へ登る入口に「西國二十二番之靈場」の古い碑文と「圓光大師五番の靈跡」の新しい碑文とが互に睨つこをしてゐるのを訝しく思つたが、立派な墓が澤山並んでゐる墓所には、法然上人の遺跡を慕うて遣つて來たと傳ふ德本上人の墓はあるが、肝心の法然の墓は無い、繰返して搜索して見たけれども一向見當らない。怎うした譯かと寺務所へ訊きに戻らうとすると、離れた崖の中程に一基の墓がある。無字の卵塔ではあるがそれが妙に獄門の形態に見えて仕樣が無い、路ならぬ路を攀ぢて調べて見ると、「淨土宗元祖源空上人墓」との細楷が漸つとの事で、剝がした苔の下から現はれて來た。それに驚いたのは法然が自ら建てたと云ふ西谷の草庵はと見ると、建て換へられてか

らまだ其麼に年數も經つては居ないが、戸は叩き破られ、床板は剝られ、泥土が一抔押詰められて臭氣が鼻を衝くといつた爲體だ、而もそれが故意にやつたことが明瞭なので僕はさつぱり譯が分らなくなつたよ。「柴の戸も開け閉て能きぬ泥小屋を、何日もと〳〵の庵と見なさん」と庵戸に貼紙をして置いて、法然の終焉所だと先程坊主の云ひ居つた二階堂といふ一階堂へ入つて見ると、白木の大きな位牌が須彌壇の正面に嚴しく立つてゐる。勿論聖人の位牌であらうと、近寄つて見ると「久遠實成大恩教主釋迦牟尼佛」とある、右方の位牌はと見ると「三世十方諸佛」左方の位牌はもとより「三國傳燈諸師」に定まつてゐる。併し左手に續いた脇壇にいろんな木像が列んでゐる。此の中に法然の木像もあるのであらうと思つたが、大日如來を中心に愛染明王、弘法大師を左右に配して、他に天部の像が二三あるが、法然の像は無い、像どころか法然を記念すべき何物も此堂には見當らない。眞言宗の寺院としては無理からぬことではある、と思ひながらも僕は何となく癪であつたが仕方が無い。しかし善導大師と

法然との影法師の映つた板があるとかいふことだが、爾うした見世物の目に觸かなかつたのがせめてもの僥倖であつた。何にしても御本尊大日如來の御存知無いことであるから、僕は恭しく禮拜し了つて、堂外へ出やうとした刹那、煤けた阿彌陀經がただ一部、塵埃にまぶれて經臺に寂しく載つかつてゐるのが目に觸いた。よし來た！此經々々、此經を誦して法然聖人を弔はうと、僕は忽ち其傍の置鐘を破るゝばかりに毆打りつけて、誦したといふよりも、聲の限りに喚鳴り倒したのであつた。滿山に響き亘る鐘の音悲しく、喚鳴倒す僕自身の聲も、そゞろに思へば悲鳴であつた。

『先程の法然罵讃僧は何と思つたでせう？。』

『何と思つたか知らないが、樫の棍棒を小脇に搔い込んで、歸り路の眞ン中に仁王の如く衝つ立つてゐるから、彼棒で僕を撲りつけるのでは無いかしら……と薄氣味惡くも思つたが、逃げもならず、仕樣事無しにこは〳〵其の前を進んで行く〳〵と、「イヤ大きに御苦勞でした」と莞爾しながら叮嚀に挨拶するので、僕は一層底氣味惡く

思つたが。坊主は心から僕に敬意を表して、親切に彼堂此像案内して呉れたよ。思へば彼れほどの法然信者は淨土宗中にもなからうぜ。』

一七　弘法と法然と日蓮と

『すると日蓮聖人などは淨土宗の大恩人でせうね。』

『勿論さ。何せ日蓮は法然の追つ驅け弟子だからね。僕は青年の頃、法然罵倒論とも云ふべき日蓮の立正安國論を讀んで、非常に法然が慕はしくなつて來たので、所謂四十八箇所巡りを企て、智恩院から元黑谷、光明寺、百萬遍、永觀堂から西へ飛んで作州の誕生寺、讃岐の法然寺、播州高砂の十輪寺、大和當麻の奥の院から、伊勢の欣淨寺、其の他の所謂二十五靈場を巡つたこともあつたよ、先言つた勝尾寺の時ぐらゐ、法然聖人を偲んだことはなかつたね。勝尾寺で法然聖人の墓前に佇つた時の心持は今猶忘れ得ないね。大地は夕靄の中に沈み行き夕陽は自分の頭腦の裡に

藏され行くかに思はれて、果ては天も無く地も無くたゞ聖人の御靈と我が心と融合つた團塊だけが存在するかの如うな心地がして涙が零れたからなあ。』

斯く語り來つた僕は、突然ぢーぐゝと背後に變な音がするので振顧ると、佛壇に掲げた蠟燭が臨終の悲鳴である。何時の程にか日が射してゐた緣側の障子がガタビシと動搖ぎ出した。雨らしかつた天候が俄に風に變じたものらしい。

『お話の法然の御靈が、勝尾寺から此處へ遣つて來たのではありますまいか。』

Y君は態と聲を低して故意らしく斯ういつた。

一八　密教と易理

『勝尾寺の坊主の法然罵倒論が、僕に法然に對する同情心を生させたことを思ふと僕の法然讃仰談に君が反法然感を生すのは當然だ。』

『イヤ爾う云ふ譯でもありませんが、人は讃美に汚され罵倒に淨められるとの、御

説を實證されたかの如うな心地がしますね。』
「それや憎む意志は佛者の所謂身布施で舍身の眞劍さがあるが、愛すると云ふことは深刻な欲望の變形に過ぎないからなあ。』
『憎む者の目は一に十を見、愛するものゝ目は十に一を見るとの何日かのお説も思ひ浮んで來ましたよ。西郷南洲が僧月照と相抱いて薩摩潟に投じたのは、對者を殺す策略だつたとも云つてゐられたですね。』
『だから絶對に自分を愛する對者が出來ると、自分の身體が分裂して自由を失つて了ふからねえ。』
『すると、絶對の敵が出來ると自分が一人に增へるのですかね。』
『自己が倍增するどころか水素が酸素に合して水と化る如うに、人は敵によつて生存に意義づけられるのだよ、突如打込んで來る不識庵の大刀を、機山が鐵扇で受止めたのも、刀を脱く遑が無かつたのでは無く、態と拔かなかつたのだからね。尤も

一つは將に將たらんと祈つた機山が、終生刀を拔かざるべきを神に誓つてゐたからでもあらうが、又一つは「刀に酬ゆるに刀を以てすれば、我、彼を殺すか、彼、我を殺すは可なり、相殺す猶忍ぶべし、されど彼若し武運拙くして我に殺されんか、生を代へ世を替へても我が慨きは盡きざらめ」と氣遣つたが爲だからね。己れを刺した外道の爲に、復讐せんと敦圉く我が弟子を制止めて瞑目したと傳ふ、婆羅提婆の心事や、六百偈の俱舍論を以て六百萬偈の婆沙論を抹殺した世親が、其の敵、衆賢を憫むの餘り、其の舌鋒を避くべく奢羯羅城より中印度へ遁れた當時の心持や、支那洞宗の中興とも云ふべき宏智が臨終に當面の敵であつた臨濟宗の大慧に、後事を托した消息などが聯想されるぢやないか。機山沒後の不識庵が鶯を喪つた鶯の如うに、快々として樂まずやがて世を後進の信長に讓つて、機山を黄泉に趁ふたのゝ無理ではないよ。』
『イヤ御説で、法然生前の知己は聖覺法印でも無ければ兼實公でも無く、さりとて

明遍僧都では猶更無く、彼の摧邪輪を著して選擇集を破斥した栂尾の明慧や、同じく法然排斥者であつた笠置の解脱であり、眞の法嗣は隆寛でも無ければ聖光坊でも無く、親鸞では勿論無く、寧ろ法然を痛罵し選擇集を攻撃した日蓮たることが明瞭して參りました。』

「法然と日蓮の關係ばかりぢやない。傳敎をして山林に幽棲しながら天台宗の基礎を築かしめた者は、謂ふまでも無く奈良六宗の代表者であり、法然をして念佛門を建立せしめた者は、謂はずと知れた南都北嶺の學匠達ではあるが、法然微つせば天台は勿論の事、眞言とても疾くの昔に亡んだ筈であるし、日蓮微つせば淨土宗は今日其の名稱すらも傳はつてゐないかも知れないせ、尤も傳敎、弘法微つせば、百の源信僧都があり、千の善導大師があつても、法然は淨土宗を起し得なかつたし、日蓮の法華宗とても、智者大師や傳敎大師よりも法然あつたればこそではあるが……

……。』

『それでゞすか日蓮の安國論は、法然の選擇集に啓發された結果だと云ふのは？。』

『それや法然の選擇集でも、事實弘法の十住心論に敎へられた結果なのだからね。謂はゞ法然は弘法の追驅弟子であり、日蓮は法然の追驅弟子なのだ。それと云ふのも弘法が最初に讀んだ書物が十住心論であつたし、日蓮の其書は選擇集であつたからだ。』

『所謂「初發心辨成本覺」で、人は誰しも純な心に初めて受入れた書物に一生を左右されるのですね。』

『それや素地に染込んだ色彩は却々脫ちないからな。』

『それにしても弟子は師匠に背かねば、己れを生かすことが能きぬと見えますね。』

『だが師匠も弟子に背かれてこそ生きるのだよ、又師匠に背くことの能きない如うな弟子なら、暗から暗へ葬られる墮胎兒も同樣ぢやからなあ。』

『併し、同じ法然の弟子でありながら、追驅弟子の日蓮と、直弟子の親鸞とは、其氣

質や性格は別としても、師匠たる法然に對する態度が何故彼麼に違ふのですかね。』

「それや双生兒でも一つの精虫が分れた双兒は瓜二つだが、別々の精虫に因る双兒は大抵男女だと云ふからな。僕が嘗て「一人の弟子をも有たず候」と曰つた親鸞は「弟子一人を有ち候だ、而も其一人は日蓮である」と謂つたのも親鸞の性格が男性を秘めた女性であるのに對し、日蓮の性格が女性を包ねた男性であるからだよ。』

『ぢや日蓮は法然の孫弟子であつて、弘法の曾孫弟子だとも云ひ得られますね。』

『しかし白鼠を黑鼠と交尾させると鼠色の鼠を産むが、其の鼠色の鼠から半白鼠が産まれ、半白鼠から白鼠が生まれると傳ふことだし、遺傳病でも三代目若しくは四代目に發病するのが多い如うに、直弟子よりも孫弟子や曾孫弟子の方が初師に酷似たものだよ。』

『それで法然よりも親鸞や日蓮の方が弘法に酷似てゐるし、親鸞よりも日蓮の方が法然に酷似てゐるのですかね。』

『そら弘法が久米寺の塔柱下から善無畏の埋藏して置いたと傳ふ遮那經を發掘したのが密敎樹立の動機となつた如うに、黑谷の報恩藏から善導の觀經疏を發見してから、法然は淨土宗の建立に手を着けかけたし、前者が皇室や貴族に依つた如うに後者も公卿や武家に據り、大法の究竟地には聖凡の差別無く、佛智の輝く處には男女一色たる大乘思想を力説して、僧俗男女を一網打盡に自宗に攝取せばやと勵んだのも又當時の論理佛敎を實踐佛敎たらしめたが、靈性の脈を絶やしながら、涅槃の靈藥を求め、上佛に背き下衆生を陷れつゝ菩提の林に入らんとし、而も經論章疏の桑の葉から戯論の糸を引張り出して、僧位の繭に惰眠を貪つてゐた當時の敎壇を、曼陀羅鍋に煮潰して、眞言と名ふ金襴衣に織込んだ弘法が王としての日蓮なら無暗と未來を空想するも、現在が未來を映寫するフキルムたることを覺らず、現實の電紐を切斷しながら、祇管に理想の電光に憧憬れてゐた現身の亡者を片端から皮剝ぎて、經宗と稱ふ祭禮太鼓を作つた日蓮は、奴隷としての弘法だね。』

僕が斯く語つて來ると、Y君は亦法然を挿む。

『併し、日蓮の折伏は、法然が、難行道の、自力の、聖道門のと先人の說を藉つて他宗を讃倒した逆眞似でせうね。』

『それに公顯的と隱顯的と、手段に相違はあるが、日蓮が上行菩薩を以て自任したのも、法然が讃州子松庄生福寺の勢至像などに姑息つと「法然本地垂迹云々」なと丶銘いて置いたり、善導大師を生身の彌陀、聖德太子を觀世音の化身と讃嘆することによつて自らを肉身の勢至と思はせたのに眞似たのだらうよ。だが法然の性格が傳敎に似てゐるといふ意味で、日蓮の氣質は弘法に酷似だと云ひ得られる、傳敎法然は謙遜鍍金の强情漢だが、弘法、日蓮は剛愎我慢な正直漢だからね。鎌倉執權を對方に廻した日蓮の龍ノ口での振舞も、弘法が嵯峨天皇の御前で大日如來の相を見はして奈良六宗の代表を「阿ッ！阿ッ！」と云はせた逆眞似なのだからね。』

Y君は此處ぞとばかりに楯突いた。

『しかし先生！日蓮の遺文は、何だか寂澄の、「國家鎭護章」だの「顯戒論」だの「末法燈明記」などを眞似た如うにも思へますし、勿論法華經弘通の先覺であるからでせうが、日蓮は傳敎を龍樹、天親以上の功勞者、天台、妙樂に勝つた聖者だなんて讃嘆てゐるですね。』

『それや誰しも己れに缺けた物に敬服するし、敬服すると對者に似るものだ。日蓮もその己れに缺けた渾味と柔味と謙德を、傳敎の上に認めたのだらうよ。併し、天台の迹を辿つて法華經を順當に心讀んで觀念に勵んだ理主事從の前者は、謂はゞ法華の難行者であり、後者は易行者だつた。謂はずと知れた玄人の法華と素人の法華だ。併し、思惟に忠に、修法を主とした傳敎は、天台法華と稱ふ文字禪に、事主理從の弘法の密敎を混和せて自己を生かさんと努めたが、感情に熱く體驗に勵んだ日蓮は、時代の逆轉に鑑みて法華經を逆に讀棄てゝ自己それ自身を法華經化せんとしたのに徵ても、傳敎と日蓮との性格が全然反對たることが分るであらう、それに宗

教革命を叫んだけれども、文句屋の寂澄は何處までも還學生であり、山林に幽棲はしたものゝ何處までも法衣に繰捲つた朝臣であつた。主上の御歸依を蒙つて宮中を護摩堂にし全國家を戒壇にしたとはいへ、弘法は徹頭徹尾普遍的であり、遣唐使と共に入唐はしたけれども、徹頭徹尾私學生であつた。山家學生式を編して我國に於ける大學の基礎を作つた寂澄の入唐は又、何處までも學究的で、書籍の謄寫や購入に憂身を窶したが、何處までも政略家であり實行家であつた空海は、理論よりも手段を學び書物よりも道具を齎し歸る事に腐心した。又それが蜘蛛の如うに論爭の網を張つて觀念游戯の享樂虫を生擒ることに專らだつた、當時の敎壇を一蹴する利器となつたのである。尤も傳敎が、文字に囚はれつゝも人間苦を突破せんと努力して內部に潜める自己の光明を發揮せばやと悶えた點は、法然などの心竊かに憧憬れたところであらう。けれども、人間生活の諸有要求、煩悶と不滿と疾病と災害より免れんとする要求を實在の扉を開く秘鍵に使つて、意識中の意識に卽つて神を體驗せ

しめんとした弘法を、攝取的革命家とするなれば、分裂と鬪爭で國家の破綻と社會の混亂と生活の不安に苛されて人々歸嚮するところを知らなかつた時代に、文言念佛たる法華本門に絕對憑依して、民族的特殊な暗示力を獲得した日蓮は折伏的攝取家だといはねばならぬ。華美、莊嚴と、簡素、充實と、新興的と復古的と、ミスチシズムとプリミチヴと相違はあるが、孰れもソシアリズムに卽したアイデイアリストであつた、而も宗敎的政治家たると共に社會的革命家でもあつた。要するに、密敎と名ふ絕對顯敎、眞言と云ふ無類無双の虛言を以つて、冷たき理智の佛敎死體に脈を搏たせた弘法の秘々中の秘々術と、實在界の象徵たる現象界に歸命し、言文上の眞實を欣求して、天外地外の理想境に憧憬れてゐた時代の人心に活を入れた日蓮の絕對方便とは、日蓮の所謂『時鳥は春をおくり、鷄鳥は曉をまつ』で、畢竟時機の相異に過ぎないのだ。』

斯う語つて僕は一息入れた。

一九　寂澄と空海と

『それに正直漢の弘法は傳敎を見たゞけの溫厚人物と見縊つたのか、怎うか、自家藥籠中の者たらしめんと、「空海生年四十にして期命盡くべし、是を以て佛を念せんが爲の故に、東西することを欲せず、宜しく所持の眞言法を、寂澄阿闍梨に付屬すべし、唯早速に今年中に付法を受取たまへ」との釣鈎に、マンマと傳敎を引つかけたと思ひの外、傳敎は弘法の囮たるには、聊か、老獪に過ぎたるところがあつた。彼が弘法の誘惑に應じて灌頂受法を乞ふたのは、天台を棄てゝ新興の密敎に轉ずるの心からで無かつたことは勿論だ。たゞ弘法齋歸の眞言秘密を自家藥籠中のものたらしめねば餘りに學究的な、餘りに出世間的な自宗の前途も、心許なしと慮つた結果、嘗ては悉曇の疑義など諭し、幾らか面倒を見てやつたこともある後輩の弘法に甘んじて灌頂受法を請ふたに過ぎない。だから弘法が門下の僧俗を集めて置いて、

「此狀を見よ。これ此の通り先輩、寂澄すら斯の如しだ」と言はんばかりに、高慢痴氣な顏をして灌頂廣告の踏臺になしつゝあるを心の中で冷笑はざるを得なかつた。斯くして傳敎を天台より眞言に轉宗せしめんと謀つた弘法は、却つて傳敎に謀られた。然し、傳敎が眞言の秘密を奪つて天台弘通の資料とすると心注いた弘法は捕らぬ狸の皮算用がからりと外れた鬱憤から、似非親切のマスクを脫して、忽ち越三昧の罪人と罵り、寂澄が禮辭慇懃を極めて釋理趣經の借覩を請へるに「子、汝」と呼び捨て、「戲論を淨めよ」の、「智心を正しくせよ」の、「三昧を越えるな」の、「敎の如く修觀せよ」のと、滔々數千言、恰も法官が罪囚を叱責するかの如うな臺辭を並べざるを得なかつたのだ。』

『成程、爾うした箇所に、何かしら日蓮と共通した稚氣衒氣が認められるやうですね。』

『だから地獄に於ける法然は、高雄山寺を奪はれ、愛弟子泰範を奪はれた上に、さ

んざ侮辱を與へられた弘法に對して、怒れる色さへ見はさなかつた傳敎の態度を以て、己れを罵倒した日蓮に對してゐるに違ひない。何せ前にも言つた通り、天台宗が傳敎沒後に榮えたのも法華經よりも大日經のお蔭だし、淨土宗の發展も經宗の攻擊に負ふところが尠くないのだからね。』

斯う言つて僕は田楽粉を燻らし初めた。

『併し天台が結局眞言に掠奪れたのも大日敎の祟りぢやないでせうか。』

『しかし子供を縁下に蹴り落すほどの子煩惱であつた西行は、世を捨てるほどの婆婆氣澤山な男だけに、歌に假託して人知れず地頭の横暴心を和げ、下民の困難を救ひ廻つた世を憚る罪人だつたが、西行の行方を逆に行つた法然は、世を怨む惡人であつた。だが西行は弘法を慕ひながら西方を願ずる人の如く靜肅であり、弘法を嘲つた法然は片時も密靜として居られぬ野心家であつた。所が體驗的佛敎を以て鑑賞的佛敎を包容した弘法は、玄賓僧都の如うに謙遜つて受入れ、隱遁れて味ふだけで

は滿足が能きず、日蓮と同じく與ふべく施すべく邁進み〳〵て已まぬ男、自己の踏み出す其の一歩も自然の導きに任すのが馬鹿臭く、我と吾手に作り出さねば承知の能きない性質であつた。』

『要するにでは弘法が『父母所生の身、速に大覺位を生ず』などゝ叫んで三密加持に勵まなかつたら、日蓮は「弟子檀那の父母所生の肉身は、妙法蓮華の當體である」などゝ三業受持を叫ばなかつたでせうよ。』

Y君は急にメートルを上げた。

『それや君！弘法が荼枳尼天を女人取入道具に使はなかつたら、日蓮も鬼子母神を婦女引入用にはしやすまいし、弘法が花洛を去つて高野山に入らなかつたら、日蓮も鎌倉を棄てゝ身延山へすつかゞまなかつただらうからなあ……』

Y君はにや〳〵笑つてゐる。僕は更に語る。

『地藏菩薩と、大黒天、不動明王と妙見大菩薩、金胎曼陀羅と光明曼陀羅、卽身成

佛と卽身成佛、御祈禱道具は愚かな事、裝飾的と實用的との相違こそあれ、顏相から姿勢、動作から書風まで弘日は酷似だ、たゞ弘法は順風に帆を揚げて華美々々しき藝術家と化り、日蓮は逆運の浪に苛まれて涙の詩人と化つたまでだ。』

『では、大日經を華嚴、般若にも劣つた方等經だと罵つた日蓮が、若しも弘法と振換はつてゐたらば矢張り法華經を戯論と嘲り釋迦を無明の邊域と罵つたでせうね。』

Y君は何故か急に覺り澄ました聲を出した。

『振換はらなくたつて、法華經の序品には「爾時、佛、眉間白毫相の光を放ち東方萬八千の世界を照らし周く徧からざる靡し」と釋迦の大日たることが說かれてゐるし、法華經の結經たる觀音賢經にも「釋迦牟尼佛を毘盧遮那遍一切處と名く」と證されてゐるではないか。』

『成程、爾う承はると弘法の出生地たる讃岐の屏風ヶ浦と、日蓮の鄕里たる房州の小湊は孰れも偏卑な海岸で何だか似通つたところがありますね。』

『それに又猿の兒は猿であり、如何な飛行家でもマサカ鷹も產み得ない如く、人は素性に初まつて素性に終るのだ。老人が小兒に還る如うに、職業にしたところで、人は他業に轉じても必ず最初の業に復さねば沈着かない、死ぬると覺悟を決めたものは一度故鄕に還るが常であり、老人が厭に若返る時は死期の迫つた時である小春日和は凋落の前日だ。急轉直下した水が噴上る如うに弘日とも零落者の小伴だけに、向上心の人並よりも激しく、燃え立つたのは當然ではあるが、前者が何處迄も國造の末裔であつた如く、後者も徹頭徹尾落魄武士の胤であつた譯なのだ。弓箭を珠數に持換へても源空は依然田舍武士で終つたし、浪々の身と化つて彼方此方と有漏ついた親鸞も、終世長袖者流だつたからなあ。』

『しかし八宗九宗を巧妙に籠蓋することによつて成立つた弘法の密敎は、後世諸有迷信の寄宿舍と化り、諸宗を折伏することによつて生れた日蓮の經宗も、眞言の內服的とは反對に、外用的ではありますが、諸宗を利用した罪に異りはありませんか

ら、いつしか賣經、否、賣狂漢の巣窟に變じたところに、因果の理法が語られてゐるやうですね。』

『それや傳敎が出なかつたら「食經虫」も生くまいし、「言はず講」の生れたのも法然が出たから、親鸞などが世間に顔出しをするものだから「裏門徒」も出來たのだ。ドンドコ法華も日蓮の一面であり、香具師法螺眞言も弘法の半面だからね、それに弘法も日蓮も雜駁な自己の思想を統一するのに、粗笨な鋭さを以て國家を利用した迷信家なのだ。今日の日本人の多くが元始基督敎の祭司化したるペテロ敎の更に神學化し資本化したるポーロ敎の、更に〳〵惡化し俗化して、虛榮に徹したる殘虐なる僞善敎と墮せる基督敎に誤まるゝに至つたのも一つは彼等の罪なのだ。何にもせよ一國家一民族に跼蹐する、否、日本人の爲になるほど異邦人の害になつたり、自分の利益になるほど他人の不利益を釀すやうな信仰運動は、私敎であつて宗敎では無い。眞の宗敎とは、自利他益で自己を救濟するその儘が、全人類の救濟と

なり、自國を革めることとそれ自身が世界の改造であらねばならぬ。況して國家どころか横暴理不盡なる一大私家、取りも直さず藤原氏とか、平氏とか源氏とか北條氏とか足利氏とか德川氏とか薩長氏とか官僚氏とか財閥氏とか云ふ强盜的一派一族に隷屬して發達して來た我國の佛敎が、今日成金の袖に縋つたり、護魔の輩や破落漢團の最負を受けて、漸つと醜骸を保たねばならぬのは寧ろ當然の事なのだ。」

『僧は喪也葬也で、喪亡破滅を目錄む人足ですかね。』

『さうだ。宗敎と云ふものからして、眞理を究明せんとする活動力を殺ぎ、生き生くる眞實の呼吸を窒息せしめる毒瓦斯だ、が古來の大亂は皆僧の所業であつて、英雄とか豪傑などゝ云ふ者は皆僧に踊らされてゐる木偶の坊だからね。僧は大善事も行ずるが、大惡事も行ずると謂つた無難禪師も、自分自身が僧でなかつたならば僧は小善事も行ぜぬが、大惡事は行ずると曰つたゞらうからね。』

『成程、爾う承はると、聖德太子以來千三百年間の騷亂は、悉く坊主の所業と

思へますね。元昉や道鏡の昔は云はずもとも、保元平治の大亂が南都北嶺の僧徒の罪であり、清盛の横暴も俊寛の如うな惡僧の咎であり、源平の戰も文覺の責任であり、南北朝の分裂も、大燈國師、夢想國師其他の禪僧の罪であり、德川幕府の專制も天海僧正や崇傳和尙の尺曲ですね。併し、日蓮でも再現してネオ安國論でもたゝきつけて吳れなきや第二の元寇が足許へ迫つて來たぢやありませんか。』

『併しそれは新しき傳敎、弘法を經、新しき法然親鸞を透過した後の日蓮でなくちやならないよ。人は皆奈良六宗の戲論の殘滓にあきゝしてゐるからなあ。事實を超越した獲的信仰に毒されてゐるからな。さうした信仰は下らぬ事物をも非常に莊嚴視するものだ。石を踏み石を眺め石室に住まへる人間は、馬糞を見ても涙の落れるほどうれしいからだ。淫祠邪敎の跋扈するのも當然だよ。市井の佛敎、否、私制の信仰すら腐り果てた今日、縱令文句を以て文句を擊つにもせよ、せめて第二の傳敎が出て山林の佛敎を鼓吹するほどの愛市心を發揮して吳れると可いがね。』

駄談は駄談を孕み愚論は愚論を生んで閑談に陶醉つた僕Yは、知らず〳〵聲高になつてゐた。

『何御用で……』

と呼びもしないのに店から小僧が驅けつけて來た。

二〇 佛敎と易理

僕は食事を命じ、Y君は、「憚りですが……」絞つても出なくなつた土瓶を小僧に手渡した。

『先生のお話によると、人は誰しも眞に敎へられた對者を覺らないものと思へますね。』

『ナーニ覺つてゐるから仇敵視するのだよ。己れに如かざる者と思へば賞讃するが己れの及ばない對者は必ず罵倒する。罵倒は恐怖の變形なのだ。眞に敎へられた對

者を仇敵視するのも無理からぬことである。敵を愛せよと古人はいつたが、世に敵視するほどの愛しかたもありやしないよ。』

『如何にも、佛敎を蛇蝎視しながら、母が觀音を信じてゐた爲に母の生前はもとより、沒後は尙更、每夜々々更闌けてから一心不亂に普門品を誦したと云ふ韓退之や本居宣長などは、熱烈な佛敎信者だつたのですかね。』

『そら古來僧侶と云ふものは、大小の差こそあれ、皆人前に經を誦んで佛前にお布施包を透視する遠夜坊主ばかりで、人に聞かれない如うに終生熱心に經を誦む、爾うした身獻な佛敎信仰者は一人だつてありやしないからなあ。』

『イヤ其事に就て思ひ出されるのは大坂の町人學者、富永仲基ですね。彼れの大乘非佛說は周く人の知るところですが、彼は大乘經典の總てを佛の所說と認め、あらゆる釋迦傳を其の儘受入れた男ださうですね。』

『又それほどの大乘非佛說の證も無いではないか。基督を抹殺しやうと思へば聖書

は固より一切の基督傳を其の儘是認すれば可いのだし、〇〇〇〇〇を抹殺しやうと思へば諸有〇〇說を肯定すれば可い譯なのだ。先程話した印度の世親でも活動盛りの三十五六年間を兄無著に逆つて、五百部の論を造つて大乘非佛說の謗讃を立てたのが、晩年後悔して更に五百部の論を造つて大乘を讃美したと云ふのは、無論死ぬるまで、求めて已まず求めて已まぬ彼れの熱心が、彼をして步一步其の理想の天堂へ邁進ましめた證據でもあらうが、實は大乘誹謗から大乘讃美に移つた時は彼れの佛敎信仰の下り坂で、謂はゞ熱い信仰から高い理論へ墮落するその時だつたのだ。彼が佛敎信仰の高潮期は、何と云つても、摩訶衍は佛說に非ずと兄無著と反目してゐた當時であつたのだからな。』

「それに彼の黃檗の銕眼が隱元の齎した明版の藏經を開版するに就ても仲基は何彼と盡力し校合まで手傳つたとか云ふことですね。」

と言つてY君は暫時默つてゐたが、

『何でも幕閣の番犬と化つて俗務に沒頭して、全然經論章疏に遠かり、文字的智識をすら缺いでゐた當時の敎壇に於ける銕眼の大藏開版は、文運の興隆を促したさうですね。』

『それに我國に於ける新聞雜誌の發刊の機運をも速めてゐるのだよ。活字が明朝になつたのも、彼經が元だと云ふからね。』

『イヤ怎うも有難う御座いました。易の御講義は、明日又出直しまして……』

『はて？僕は易の講義以外に何か話つたかね。』

『だつて墓話から易に移つたところへ、宗門談に火が點いて、法華、眞言から八宗九宗に延燒したものですから、易は片付けられて了はれたぢやありませんか。』

『ナーニ方便品の所謂「十如是」日蓮の所謂「十界依正卽是妙法」で、十界は數の象であり妙法は數の理であつて、法華は數の解說であり歌であるし、易は數其物だよ。取りも直さず陰陽靜動の眞姿だね。數無くしては陰陽もあり得ない。差別相卽

實相と云ふのも數卽陰陽の意であつて、數を他にして差別は無く差別を他にして實相は無い。易の大極卽乾坤とは、木の葉でも同じものは二つと無い如く一切事物は差別その物であつて而も其の本體實質は何れも無差別の一、不可分の一であることを語つてゐるのだ。「易が大乘佛敎の根源だと云ふのも、佛敎が數を基調としてゐるからだ否、佛敎ばかりで無い一切の宗敎、一切の哲學が數を離れて存しないからである否、天地も數の表現であり、萬物も數の變化である。華嚴が十地經を根本とし龍樹の十住毘娑婆も十地品の論釋に他ならない。十地品や遮那經の十心品から十住心論を作つた弘法は素より三論宗徒であつて、要するに我國の龍樹であるが、龍樹は元來易道家であつて、彼が三諦中觀論は易の所謂「三爻正中觀」であり、非有非空は「陰陽一道乾坤卽大極」で嘉祥の所謂「一念不生の達觀」、弘法の所謂「無垢の眼を豁かにして三密の源を照し、有執の縛を斷じて五智の觀に游ばしむる」ものである。自然法爾の妙理たる易を、不可得裡に得せしむる般若の見解に他

ならない。龍樹の智度論と十住毘婆娑とても、乾坤一生男女一體の易說以外に何も無い。然しそれは外典の、內典のと云ふ如うな宗內漢には解らぬ消息だ。まして宗乘の餘乘のと謂つてゐる四乘漢をやである。況んや易理の象徵たる佛敎の須彌山說を、測量した科學的地圖と見て滑稽視する如うな滑稽な人間をやである。はゝゝ。』

Y君は小僧の持つて來た土瓶から僕の茶碗にも茶を酌んで、

『さう承はると如何なる經典も數字を除けば火鉢から火を除いた如うなものになつて了ひますね。法華は三に動き法相は四に見れ、大經は五に生き、華嚴は十に輝くと云ふのも道理ですね。』

『染淨明悟の別を諦にすると說ふ法華八卷は、陰陽剛柔の別を諦にすると云ふ易の八卦であつて、迹門は象を成すの乾、本門は法を效すの坤、三諦圓融は三才互融であり、一念三千は三才互融して萬象俱會一元なる易理に他ならないからな。』

『イヤ洗心藏密の易道は、六根淸淨の神道たると共に、法爾妙法であるとは承はつてゐますが、密敎も其麼に易と交涉が深いのですかいなあ。』

『深いどころか密敎は易敎で眞言は易言だよ。何せ詩經が易の歌である如く、古事記は易の和歌であり、尙書が易の傳記なら書紀は易の歷史化だし、春秋は易の占例であり、法華經は印度の易經だからね。傳敎や日蓮の成功も法華が我國の神道と同じく其の根底が易であるからだ。然し、密敎は易哲學の體系的表現で、弘法の兩部神道說も密敎中に籠つてゐるのだよ。』

『それに弘法は「伏犧の易は一字に多義を含む」とか、「龜卦爻箸、萬象を含んで盡くること無し」などゝ周易の講釋までしてゐますが、密敎は波斯の拜火敎と印度の波羅門の二敎の糟粕が支那化した迷信だとか仰在つて御座つたぢやありませんか。』

『さあその拜火敎や波羅門が波斯、印度の易敎なのだ。支那の周易なんかも儒敎化して道德的色彩に瀆されてゐるから、易の眞相を觀誤り易いが、波羅門は固より拜

火教にしたところで、その土地々々の風俗や習慣に濱され俗化し迷信化してゐるから、其教から易の眞髄を掴むことは砂中に玉を搜る以上の困難だ。殊に弘法の密教なるものは希臘や波斯の文化に育まれた波羅門や、拜火の糟粕が耆那教や佛教思想の殘滓に加はつた上に、支那の淫靡思想が混交り、更に日本の易道たる神道の織り込まれた雜駁至極のものではあるが、それでも易の範圍を脱してゐない。』

『すると彼の密教の中心本尊たる不動明王卽大日如來は、周易の所謂乾坤二卦の藝術的告白ですかね。』

『それに眞言の身、口、意の三密加持は、勿論戒定慧の三學であり、法、報、應の三身景教の所謂三一妙身でもあり、儒教の智仁勇であり、鏡、劔、璽の神器でもあつて、取りも直さず易の理、數、象であつて、謂はずと知れた天人地の三才卽ち時、物、空の飜案なのだ。而も釋迦の苦集滅道とも觀ぜられ、神道の四魂乃至胎卵濕化の四生とも化り、春夏秋冬の四季とも變じ、東西南北の四正、乾坤巽艮の四隅でも

ある易の四象に準へて、大、三、法、羯の四曼陀羅を作つた密教が、地水火風空識の六大を以て諸法の本源體、卽ち一切法の能造緣起の根本と云ふのは、周易の重卦六爻が六十四卦三百八十四爻の根本體であるのと一つである。六大一實を達悟するを以て密教の秘極であると云ふのも、周易が六爻の變化を以て大極の靜動と觀るのと何等異つたところは無い。左樣！六大は元より大日だよ。佛形ありとするのは、譯ふまでもなく自性の外に法界身を立てるのだ。人法一體は所謂天人一貫で、自然と人生の愛の楔子たる易德の象徵さ。何、密教の印契か、それも周易の筮竹さ。合掌して指頭相拄へ、指間を隙かして未敷蓮華の印相と、中の三指を開いた八葉開敷の印相とは、取りも直さず陽爻(一)と陰爻(一)である、而も此の陰陽二爻が一爻の表裏であつて、八卦六十四卦の根本體である如く、如上の二印相も一印相の開合であつて、諸有印相の根本相である。而も五十策の揲筮が易理活現の象である如く、五指と手との叉縛が佛性開顯の相なのだ。』

『ぢや密呪は周易の彖辭爻辭であり、儀軌は應比正中の妙用であり、觀相は易理の闡明とも觀るべきですね。』

『そして因より果に向つて上に轉ずる智の金剛界曼陀羅は、剋より生に向つて左に施る易の河圖であり、果より因に向つて轉ずる理の胎藏界曼陀羅は、生より剋に向つて右に施ぐる易の洛書だよ。』

『大日卽彌陀と云ふのも無論乾坤二德との象徵でせうね。』

『そら大日は易の所謂健々自彊、往生とは往き生くるで、易の所謂生々不息だからね。』

『それに彌陀思想と易の思想も亦陰陽でせうね。』

『それや周易の「風天小畜」の彖辭に「密雲不雨我自于西郊」とある西郊も「隨」の上六の爻辭に「王用而饗于西山」とある、西山は穴勝ち西周の郊外や、山岳の意ではないからね。乾坤を謳つた華嚴、涅槃を主觀的に說いた大無量壽經も、易の

宇宙觀であり、人生觀であつて、彌陀淨土の因緣たる五劫思惟の五は、易の所謂生數で彌陀淨土の因緣であり、十刼正覺の十は易の所謂成數で衆生往生の因緣である。謂ふまでもなく「乾坤列を成して象其中に在り」は華嚴の「非情有情同時成道」であり涅槃の「草木國土悉皆成佛」であつて、「坤々列を成して易其中に立つ」は「天上天下唯我獨尊」であり「一切衆生悉有佛性」であつて、取りも直さず南無不可思議光と歸命無量壽如來ではないか。」

『それでは六道の衆生には八葉の佛を具することを四十八願とするのも易の數理に基いてゐるのですかね。』

『それや易の重卦六爻に八卦を具するの意を釋いたまでだ。乾坤兩卦の錯綜に過ぎない易の六十四卦は、其の本體たる乾坤兩卦と、兩卦の變卦十二卦と都合十四卦を除いた四十八卦が事相上の卦であるが、四十八卦卽ち四十八願なのだ。』

『それでも密敎では眞言正業念佛助業と云つてるぢやありませんか。』

『それや幾ら夫婦は一體だと云つたつて、夫は女房を指してマサカ自己の本體だとも云へないぢやないか。はゝゝゝ。』

『すると大日經疏に「謂阿字門一切諸法本不生故者、阿字是一切法敎之本。凡最初開口之有阿聲」と說ふのは、易の大極を音聲に假託した譯ですな。そして「阿字有三義、謂不生義、有義、空義」と說くのは「易有大極是生兩儀」の意でせうね。』

『しかし大日が諸尊の總名であり、諸尊が大日の別名である如く、大極と乾坤と區別を云ふべからずと、葛城の慈雲尊者も說いてゐるが、大極と兩儀四象六十四卦三百八十四爻は總別の意であることは謂ふまでもなからう。實儀に約せば各卦各爻悉く大極である如く諸尊悉く大日なのだ。』

『イヤ能う分りました。密敎徒であつた慈雲尊者が、神道は易を知らねば分らないといつた理由も分りました。』

『ナーニ慈雲ほどの横着漢が、其麽無駄な努力をするものかい。』

『でも彼は密敎徒でありながら、神道や易にも通じてゐたぢやありませんか。』

『何も知らないから密敎徒ぢやないかね。眞の密敎とは知ると云ふことを無くすることだ。』

『そら眞に知ることが無くなれば、一切が知れた時でせうけれども、事實果して如何ですかね。』

『怎うもありやしないよ。生きることを知り出してから人は死んで了つたし孤獨を知り出してから妥協に墮して了つたし、自由を知り出してから行詰まつて了つたぢやないか。』

『イヤ成程「知つた」と覺つた時は、喪失つた其の時だ」と仰在つて御座つたのは、這箇の消息ですな。』

『左樣！眞に信知と云ふことは根こそぎ喪失つて了ふことだ。』

『イヤ分りました。慈雲が「支那の蒼頡は鷄の足跡を見て文字を作つたさうだが、我國の神道は鷄其物である」と、謂つた意も解つて來ました。』

『それや肺病は天才を作るかも知れないが、了解病は天才をも盆栽では無い凡才に化するからなあ。』

『では文字の草履を脱いで本性の蹠で本然の土を踏み、文化の衣服を脱して眞實の裸體に還らなくちやならないですね。』

『そら蹠が土と觸れるのは、自然の肌と人間の肌との接觸は人天親和の土臺だからね、又、神人一體の神道も、天人一貫の易理も其處に秘んでゐるのだからね。併し、文字の下駄を履き出してから、人は皆蹠が土から隔離れて了つて、踵で息をしてゐた人間が肩で息をするやうに墮つて仕舞つたよ。知れは喪ひ言へば消ゐる。改造と言へは改造が亡くなり文化と言へば文化が消ゐて了ふ。易と云ひ出してから易の行方が知れなくなつたし、神道の佛教のと云ひ出した爲に孰れも何處かへ去つ

て了つたぢやないか。神は此處に見よ彼處に見よと云ふべきものではないと古德のいつたのも其處なのだ。』

『すると道とか教と云ふものは各民族の因習や傳統の鑄型に嵌り、國々の制度や法律乃乃至德に固まつた本然生活を破壞する石塊ですかね。』

『胴體と離れた頭腦、生殖器の關係の無い腦味噌でもおらうよ。』

『併し易は業の科學的解釋、取りも直さず無明と我の因緣を說つたのもとか仰在つて御座つたですね。』

『それや華嚴や無量壽經が電氣學であり、光學であり、星學でもあつて、涅槃經が煉丹術であり精金法であるばかりで無く大乘經典は東洋古代の精神科學であると共に物質科學たる如く、易だつて矢張りさうなのだが、又生欲哲學でもあるのだよ。』

『え？生欲……』

Y君は怪訝な目を睜つた。

「これや驚いた！君は生殖原理たり、閨中秘抄たることすら知らずに易を云々し、文字の春畵たることすら辨へないで神典や佛籍を誦んでゐたのかね、はゝゝゝ。」

催眠術にでもかゝつた如うに、會も會知れぬ顏相をして少時考へてゐたY君、

『それや私だつて、生殖卽ち生成で、天地も畢竟男女であるから、「天地絪縕」は取りも直さず「男女構精」で、生々不息の元氣であること位心得てゐますよ。「天之命之を性と謂ふ性に從ふ之を道と謂ふ」と、子思の謂つたのも周易の繫辭に依つたもので、易が性道卽ち兩性哲學たることは先刻承知してゐますよ。』

『それや爾うだらう。僕が此前、君に話したのだから……』

『……』

『だが、易は又、生欲の火の火と、淨化の要求の葛藤を截斷する生命の劒でもあることは分つてゐないやうだね。密敎に淺略、深密、秘中の秘、秘々中の秘のある如く、易にも種々ある。黃卷赤軸の易もあれば、所謂法爾恒說の易、卽ち是れ天地萬

有の當體であるが、眞の易なるものは、自然の本性に悖らぬ生活其物であつて、秘々中の極秘が無秘密である如く、易無きに至るのが眞の易なのだよ。』

『すると人は己れに缺けたるを表現すると云ふのは、全く缺けてゐれば表現の仕樣もありませんが、表現することにより生命が亡くなつて了ふとの意味なのでせうね』

『だから人は能く外皮硬化と云ふけれども、外皮は硬化の第一歩で、易も卦象などゝ稱ふ如うな、アルファベットが出來た時、既に亡んでゐるのだ。大昊伏犧氏が易を劃したのは、謂はゞ易を滅ぼしたのだ。佛敎も釋迦が四諦の、十二因緣の、八聖道のと、說ひ出した時、既に滅んでゐるのだ。密敎、神道は愚か、波羅門敎にしても、耆那敎にしても、言語にあらはした時に、既うちやんと滅んでゐるのだからなあ。』

對話に身が入つて打拋らかしてゐた膳部の箸を採つて僕Yは食事に取掛つた。箸を下すか下さぬかに、Y君は何思つたか、膝を乘出して、

『今思ひ出しましたが、ツイ此間死にました元眞言僧で、慈雲尊者に私淑してゐましたが、後、淨土宗に轉じて、茨木在の慧光院と稱ふ寺に居りました戒譽大順と名ふ坊主が、今朝程お話の勝尾寺の二階堂を永らく借りて居たさうですせ。何でも餘り繁昌した爲に、勝尾寺の住職に羨望がられて放り出されたとか聞いてゐますが……』

小半日對話續けたが、歸らうとかヤレともせずにY君、話を最始へ引戻した。僕の感興も冴ゑ返つて來た。

二一　親鸞抹殺論

『なんせ夜徹し夫婦喧嘩を行つてゐると、入りかけた泥棒も躊躇逡巡する如うに、國家的命脈の絶えてゐる支那が分割を免かれてゐるのも、南北相爭ふのみならず、賴外派と抗外黨と相軋つてゐるからだ。日支兩國の不親善が白人の反黄熱を緩和してゐるのだからな。信仰の脈が絶えてゐる伽籃堂は內裡紛擾が無けれや維持ちやしないよ。大體、日本佛敎と稱ふものは喧嘩の盥廻しで發達したのだからね。南都は北嶺と爭ひ、南都北嶺は淨土宗や禪宗と戰ひ折伏專門の日蓮宗も特に淨土宗を攻擊し、淨土宗は分家の癖にといつた具合に眞宗を攻擊し、眞宗は本家系統の淨土宗を攻擊すると世間の同情を喪はんことを恐れてか、但しは宗意の中心を奪つたのを氣の毒に思つてか、ねつそりと日蓮宗を攻擊し、曹洞禪と臨濟禪と攻擊の仕合ごつこを行るは愚か、各宗ともに宗內に幾つも派を樹て黨を分つて、年闘年中攻擊や排擠で日を送つてゐるお蔭で保存て來たのだからな。』

『それに眞宗などは御開山以來、何だか親子喧嘩によつて發展して來た如うにも思はれますね。』

Y君はます〳〵尻を据えて來た。僕も乘掛つた船だ到着點までと腹を括つた。

『だから「父母孝養の爲にとて一遍にても念佛申したる事候はず」じやないかね。』

『はゝゝゝ基督が「女よ、爾と我と何のかゝはりあらんや」が聯想されますね。』
『却々巧妙い對照を言ふね。怎うだ一つ「聖書聖典對句辭典」でも編へたら……。』
『はゝ、以て福音書の眼鏡から嘆異抄を覗くが如き素振に見せて、欲生信仰の代りに、リードドラマ、念佛で無くて念淫を嗾かす儲術家の寶典たり得るでせうね。』
Y君は冷やかに笑ひながら何時にない澁玄い顏をした。
『それや非僧非俗の同行だつた親鸞もあれば、非獸非人の親鸞もあるし、世は全滅びても猶滅びざる基督もあれば、黄色つぽい女の淫聲先づ響いて氣障つぽい男の肉音を袖引出し。果ては男女のコーラスと化る敎會と名ふ歌劇館の玩弄物になつた基督もあるからなあ。』

二二　新案登錄簡易筆蹟研究法

『それに又、「主上臣下背法違義成怨結念」と喝して、「あたり前の民家を少し手廣くして置いたら澤山だ』といつた親鸞もありますれば、『朝家の御爲、國民の爲に念佛を申合はせ給ひ候はゞこそ芽出度候べし云々』と讃へて、紫宸殿造の大伽藍の高壇にさも暖かさうな服裝をして福々さうに九學十字の御名號を尻にして平太り込んだ親鸞もあり、愚禿凡夫と卑下して九十年の紙子生活に孤り寂しく自己の罪障の深きに悸いた親鸞もあれば、恩師からの命名すら改めて、六高僧の名を自分の名に掠奪つた親鸞もありますね。』
『それや宗敎製造所たる我國は言ふまでも無く祖師製造國ではあるが、悉く支那印度の模倣で、紐製濫造を以て聞え、纔に內地人の一時の需用を充たすに止まるが、流石安價にして破壞し易き玩具の特產地だけに、其の種類は却々多い。隨つて同じ名の祖師でも幾種あるか知れやしない。親鸞だつてまだ〳〵あるよ。一人の弟子も有たなかつた親鸞もあれば、二十四人の大弟子を有つて、釋迦や聖德太子傳の擬傳とも見られ、經言に依る素人念佛の宣傳書とも見られる例の「御傳抄」に、夢の如

うに薄ばんやりと現はれる親鸞もあれば、五百に近い人間を網羅した、虎關の元亨釋書は申すに及ばず、高泉の扶桑沙門傳、東國高僧傳は素より、千六百六十二人も列べた七十五卷の師蠻の本朝高僧傳にも漏れ、兼實公の玉海や三條公の明月記其の他當時の公卿の隨筆や日錄、物語の類は悉か、增鑑や東鑑は勿論源空聖人の私日記首め、本朝祖師傳繪詞、十六門記、法然門下の黑谷傳若しくは關係書の總てにも、殊に念佛無間を叫んで、亂書狂と云つても可いほど、書いて〳〵書き捲くつた日蓮の彼の澤山な遺文中にも、其人らしい名すら見當らない親鸞もあるかと思へば、最高貴族の坊ちやんで、二歳にして念佛を唱へ、四歳にして三尊の土偶を作り六歳にして當時の高僧を驚かし、十六歳から十八歳までに「華嚴」「法相」「三論」を究盡し、爾來「因明學」の秘奥から「唯識」の奥義に通じ「律」を修め「倶舍」を學び、二十一歳の一月から三月の中旬までに、三觀一心の觀方から三密瑜伽を修め、二十五歳にして先師慈鎭に代つて、小止觀や往生要集を講じて師の難問を逐一に透

過して叡山の碩學と推され、山內の一方を統ぶる聖光院門跡に任せられ、二十六歳の時、禁裏に於て名歌を詠んで主上首め堂上人を驚かした親鸞もあれば、花洛武士たる平氏に蹴散かされ、野武士たる源氏に踏躪られた公卿の落胤、一念義を唱へて其の師法然から破門された成覺坊幸西の手下となつて、法然には會つたことすらないと傳ふ親鸞もあるし、荷持に匿れて一生を終つた敎信沙彌の芳躅を慕ひ僧や比丘と云ふ名は高位の者の駕籠舁の名と化つたと嘆き僧團を脫して一沙彌と化つた親鸞もあれば、賣宗夫に擔がれ賣辯賣文の材料に使はれて、男女の密會を勸め賣女信心をそゝのかし、淫蕩保護に力めて、迷信屋にすら蹴散らかされる親鸞もあるからなあ。」

『それや「何宗の祖師にもあらず」と叫つた日蓮もあれば、十八本山とか二十一本山とかの祖師に成つてる日蓮もありますし、法華經國の護持に力めた日蓮もあればブルジユワア國や、ミリタリズム國の寄生虫たる日蓮もありますからね。』

『それに法爾恒説の法華を讀んで法華を説かなければならなかつた釋迦の心機に觸れた日蓮もあれば蝕食つた版本の法華に讀まれて了つて「失正暗黒論」を唱へた日蓮もあるよ。同じ宗祖なるものゝ墓が何基もあつたり死に場所が何ケ所もあるのが當然だね。』

『然し、墓所や死所の多いのは初めから生れてゐなかつた證據ぢやありませんか。最も日蓮は眞蹟が多いのと、遺文なるものが日蓮自傳でもありますから、親鸞の如うに抹殺者は無いやうですが……』

『世の中に人殺しも多いが、石女の兒を殺さうとした者も無ければ、生まれぬ先の親を殺した奴も無い如く、全然無い人間なら抹殺しやうとする者も無い道理ぢやないか、又、自叙傳は他叙傳であり他叙傳は自叙傳だよ。といふのは僕は未だ筆者自身の現はれてゐる自叙傳を讀んだことも無ければ、筆者の見はれてゐない他叙傳を觀たこともないからな。僕は日蓮に抹殺論者の出ないのは、日蓮の遺文の罪であり

折角火の手を揚げかけた親鸞抹殺論が直ぐと下火になつたのは、絶へて自分を語らぬ親鸞が、自分の事ばかりを語つた「教行信證」の後序の咎だと思ふね。彼序さへ無けりや、自己を語るほど、人間の數が增加えてゐる日蓮の遺文とは反對に、自己に就いて何も述つてゐない親鸞の述作は、一人格の氣質と性情で串貫かれてあるのだが惜しい事をしたものだ。』

『然し、親鸞抹殺論者が親鸞崇拜者で無い如く、「大字、中字、細字其の他何字なりとも、楷、行、草、隷、其他の書體、軸、額面、屏風、襖、式紙、短冊、手紙の類に至るまで貴需に應ず」といつた如うな、彼の「親鸞聖人筆蹟之研究」を著へた辻博士や、「立像、腰掛像、坐像、半身、全身、直向、左向、右向、其の他何宵像なりとも御註文に應じ可申候」と云はんばかりの「親鸞聖人眞像之研究」を發刊した山田文昭師の弟子とかは何も親鸞を呪つた譯ではないでせうよ。』

『それやさうだらうよ。守屋は何も佛法を盛行らさうと思つて、佛像經卷を堀江

に投じたのでも、「ほとけさま」と崇めさす了見で「ほとをりけ」と名け、更に「ほとけ」と約めたのでも無く、韓退之は何も惡僧藻屑僧を陶汰させし、敎儀を肅正させて、より隆盛ならしめやうと思つて、攻擊の鋒を佛敎に向けたのでも無いからね。又たとへ一人でも呪ふ者があれば親鸞も浮び上るのだが、そんな身献さを今日の人間は持合はせてゐないさ。何せ露國を破壞さうとして厄鬼に運動つてゐたラスプーチンが殺されると、却つて露國は瓦解したからなあ。だが僕はあゝした著書を觀る毎に何かしら、伏見深草の彼の『雀のお宿』の繪葉書が聯想されてならないのだ。』

『え、？』

『と言つたゞけでは分るまいがね。まあ聞き玉へ、何日だつたか僕は深草に元政上人の遺蹟を訪ね、彼の光嚴帝が年經れば草木が繁殖して塚か何か分らなくなるだらうとの御思召から「松柏を塚上に植ゑよ」と遺詔らせ給ふた如うに、「墳上たゞ三竹を植ゑて墓石にかへよ」との元政の遺言を怎う解してゐるのか、殖ゑるづゝの竹を片

つ端から引拔いて、今猶キチーッと三竹の儘、木柵で圍み錠前を下して標柱を建て拜殿の築かれた「元政上人之竹墳」なるものを見て、今猶靑葉の生えてゐる須磨寺の敦盛笛を聯想したり、其の竹墳ではないが、日蓮を經宗と云ふ木柵で堅め、囚派心の錠をおろし、外形と云ふ標柱を建て愚信、妄信の拜殿を築いた日像上人の遺跡たる寶塔寺と稱ふ日宗寺院に詣でた歸路に、音に聞えた彼の「雀のお宿」を訪れたのだ。所が癩癲病の金貸業めいた綺麗な家なので、「これや失禮！門違ひを致しました」と辭去がらうとすると、窓際の屋根裏に大小無數の瓢簞が浮羅下つてゐるのが目に觸いた、「待てよ！怎うやら此瓢が雀の島屋らしいぞ。何瓢にも雀の出入穴が穿けてある。聞けば此家の先祖の懷中へは始終雀が飛び込んだとか云ふことだが、斯麽にして雀を招いてゐるのに、日は將に暮れんとするに、根つから雀が遣つて來ない。熟視ると、瓢簞には何故か名士名將名優から、宮樣の御名札まで貼られてある。これぢや如何な雀も恐縮して近付得まいと畏れ入つて辭去がつたよ。尤

も去がけに雀の鳴き聲が聞えたが、其雀は隣家の屋根に止まつてゐた。併し彼宿に賣つてゐる繪葉書には、瓢簞の緣や內裡に雀がウヂヤついてゐるよ。勿論生死の程は判らないけれども……』

『しかし辻博士の彼書は、長沼賢海氏等と共に、國史編纂局の定論となつてゐた親鸞抹殺論に傾倒してゐた博士の、懺悔錄だとか先程申上げた五右衞門研究の友人S君も云つてましたぜ。』

『だから僕は何も博士の「親鸞聖人筆蹟之研究」を、雀のお宿の繪葉書と同一視してはゐやしないのだ。何故つて君！繪葉書の雀は縱令死雀を齎て來て撮影したにしても、本當の雀であることは誰の目にも明瞭だが、博士の彼書を見て親鸞の眞蹟か否かを鑑別け得る者がありさうに思へないではないか。』

『ツイ近年まで親鸞の眞蹟は一點も無いと決まつてゐたのが、一時に五十五點も現はれて、世界中の祖師中で、日蓮を除く外、一番眞蹟が多いことになると、何百年

後になると、世界の反古市場は親鸞の眞蹟で埋つて了ふかも知れませんね。併し親鸞當時の記錄中、全く其の名をだに止めざるを幸ひに、覺如が好きすつぽうに捏造したものだ。隨つて他の根本史料に抵觸すると云つて、現代史家の多くが史的價値を認めないのを遺憾として、親鸞の傳記研究に憂身を窶してゐる眞宗講師の山田文昭氏は「本書は永仁三年の編述で、聖人滅後三十四年しか經つて居ず、賢智の如き聖人面授の弟子も生きてゐたから、覺如が僞作捏造したのであつたならば、何條默過しやうぞ」などゝ力說てゐるやうですね。』

『だが僕は嘗て天理敎祖のお美伎婆さんに隨つて布敎に從事してゐたと云ふ婆さんの甥や、二三の直弟子から、お美伎婆さんの性行を聞かされて聊か感心もしたけれど亦莫迦らしくも感じたことがあつた。然るに、其の後大和三島に同敎本部を訪れた時、其の中の一人からお美伎婆さんの傳記を頒たれたので早速一讀して見ると、先に聞いたお美伎婆さんとは殆ど別人かの如うに、誇張され潤色されてあつたか

ら全然厭になつちやつた。尤も其の人達に質しても見たけれども、顧みて他を云ふ者や座を去つて再び顔を見せない者や、二枚舌を使ふ者ばかりで不得要領に了つたが、僕は其の不得要領の答辯に却つて要領を得て覺えず苦笑したことがある、所が其後偶、お美伎婆さんの片腕であつた男の伜とかで、婆さんの沒後、天理敎を脱して、天理敎樓とか稱ふ女郎屋とかを營み、女郎に天理踊を演らしてゐるとか云ふ某に遇つたので、前云つた美伎子傳を示して意見を徵して見ると、意外にも該書の內容を無造作に其の儘肯定するのであつた。僕は頗る變な氣がしたが、聞けば其の男は同敎の幹部と不和である爲に、幹部への面當に同敎攻擊をやつてゐるので、敎祖には生前非常に厄介をかけ、可愛がられもしたのですが、敎祖の事といへば盲滅法に褒め千切るとの事、而も斯の話は婆さんが死んでから十二三年後の事である。天理敎に限らず金光敎其の他の宗敎神道の宗祖にしても、佛敎諸宗のそれの如うに誇張され捏造され中には烏を鷺、アバタが笑靨に記されてある。現に眞言宗の皮相

と金光敎の弊害とを搗交ぜたかの如うな、德光敎と云ふのを開業した敎祖の德光爺さんは僕もマンザラ知らぬこともないが、まだ死んでから全二年と經たないのに、同敎の役員や信徒は蚯蚓を龍といつてゐるではないか。もしそれ此間死んだ問題の歸魔敎々祖に至つてはその墓を桃山御陵に摸したを徵ても誇張の程度が推測られやう。垢染た緋ネルの腰卷一つで跣足で紙屑を拾つて廻つてゐたことでも、宛ら緋袴を穿いて天上界を翺翔つてゐたかの如うに讃うてゐるが、眞面目に抗議を申込む物好きは一人だつてありやしないからね。』

『すると文昭さんも本山を脱して、何處かで御和讃踊でも演つてゐるのかも知れませんね。はゝゝゝ』

『併し其處までの愛祖心のある者があれば、眞宗も天理敎などにしてやられはしないのだが……』

『轉娛は廢しまして親鸞を假に實在の人だとしましても、或は一人で無いかも知れ

ませんね。』

『さやう、釋親鸞、通稱は覺如、字は如信、彌女と稱し、聖覺法印、幸西、其他無數の別號ありだね。はゝゝゝ、打ち明けて言ふと、親鸞に限らず宗教の開祖と云ふものは、謂はゞ株式會社の代表者であつて本體實質は一人で無いに決まつてゐるよ。偉ければ偉いだけ對者は多いのだ。釋尊などは何千何萬人の代表者か分りやしない。八万四千の法門 卽 八万四千人の所說とも見る可きである。大乘佛典は勿論、釋迦の四福音たる四阿含經からして添加竄入の凝塊だ、釋尊が生年に就いても前後五百年も隔たつてゐるし、古來四十八傳あると傳つたのはズツト〳〵の古で、今は八萬四千傳どころぢやあるまい。起信論をイヤ支那の產物だイヤ印度の所生だと言ひ爭ふ が生きるのも、作者の馬鳴が印支兩國人の代表者であるからだ。イヤ龍樹以前の人だの、イヤ以後だのと不知烏雌雄論も生らうではないか。六馬鳴など、傳つてゐるが、六は六方恒河沙數の六であるかも知れないよ。淨土論が世親の作だ、

ナーニ古世親の作だと爭ふのも、世親以前に古世親あるが如く古世親以前に古々世親があるからだ。』

『龍樹が千部の論師、八宗の祖となつたのも一人では無かつたからでせうね。提婆だつて何人あつたか知れんと云ふことですし、善導の如きでも終南大師、光明寺和尙二人だけではないやうですね。』

『梵網經の一華百億國、一國千釋迦說や勢至の天冠裡に無數の佛在すとの觀經の說乃至孫悟空が己れが一毛を口に啣んで吹き出すと無數の小悟空が飛び出したと云ふ西遊記々者の戲言にも這般消息が語られてゐるのではないか。「鼻下一寸あるものは百歲の壽を保つと傳ふが眞か」と玄宗の御下問に對して、東方朔が呵々大笑したのも道理だよ。』

『何です？其話は……』

『何でも無い。「朕の言を笑ふとは不埒である」と、玄宗が逆鱗すると、「臣、陛

下を笑ひ奉りしに非ず、東方朔の鼻の下の長さより身長に想到して失笑を禁じ得ざりしのみ」と答へたと云ふぢやないか。』

『はゝゝゝ成程、鼻下一寸あれば百歳の壽を有つとすれば、八千歳の東方朔は鼻下正に八尺、それに準じた身長は二百間近くになりますね。すると歴史上の人物と云ふものは奈良の大佛見た如うなもので、大勢して捏ね上げた偶像に過ぎないのですかね。』

『阿曇仙人も一代で七百歳生きた譯でも無く、伊勢の齋宮に立たれた垂仁天皇の皇女姫だつて、御一人代で五百歳近い長壽を保たれた譯でも無からう、武内宿禰は何代もで五代の天子に仕へ三百歳だと傳ふ事だし、源義家でも奥州で貞任兄弟と戰つてゐた義家の外に、京都に居つた義家もあつたとか傳ふじやないかゝ斯うした異體同人を作ることは、三民族を三皇と稱へ、五時代を五帝と稱する支那は勿論、支那文化を受けた我國の風習、否、世界一體の風習だよ。縱令又それが一人であるにしても世に現はれた人間の奥には必ずそれを現はした人間が潜んでゐるものだ。それは今も昔に異らない。といふのは玄人に好評る藝術家は商賣にならず。學界に歡迎る學者は俗界に流行無いものだが、更に眞理に忠なる學者は學界にも不評ず、眞に藝術に忠なるものは他が對手にしない、否、眞の學者なり藝術家なりは、自分が何であるやら本人自身にも分つてゐないものだ。然し、學界にもせよ、俗界にもせよ、表に現はれる者の根になり、種子になるものだ。見はれるものは生む者では無く賣る者である。謂はゞ商賣人だ。商賣人は、見はれぬ者謂はずと知れた生産者から代物を仕入れるに定つてゐるよ。一將功成つて萬骨枯れるのも事實だが、一卒現はれて萬將の隱れるのも虚僞ではない。例へば我邦近古の文豪たる賴山陽をして賴山陽たらしめたものは父の春水であつた。世界的思想家たりし露國のトルストイをしてトルストイたらしめたものは、其兄ニコライ少佐であつた。然しながら、僕は、父や兄を自分の衷に生かした山陽やトルストイを豪いと云はぬと同時に、我子をして

我弟をして、自己を其の衷に活かさしめた春水や、ニコライは更に偉かつたとは言ひ得ない。何故かと云ふと、眞に山陽やトルストイを拵へ上げた者は、春水やニコライ少佐のまたその奥にひそんでゐるからである。此の兩人に限らず、遠くは龍樹菩薩に對する大龍菩薩、世親菩薩に於ける彌勒菩薩、近くは天一坊に於ける山内伊賀之亮、豐臣秀次に於ける木村常陸之介、石川五右衞門に於ける波天連敎師といつた如うに、名前どころか影も形も知れてゐない人であるのだ。朧氣ながらも分つてゐる連中は日南武者であつて蔭武者では無い。眞の蔭武者は礎石の下の礎石であるから、人の目に觸く道理も無い。目に觸いた時は蔭武者では無くなる。又、眞に自己を他の衷に生かす人ならば、己が名の傳はる道理が無い。世に偉人とか傑物とか讃へられてゐる人間が何物かの看板であり虛僞である證據は、彼等の子弟が大抵不肖の子弟であるのに徵ても分る。若しも彼等が眞實漢であつたなれば必ずや其の子弟にも眞實漢が出なければならぬ道理だ。然るにそれが然うで無い譯は彼等が畢

竟看板人物で世間的に持上げられ、持て囃されてゐるだけのものであるからだ。其の中身のプコアなることは論ふだけ野暮であらう。眞に豪い父兄ならば、能く其の子弟の衷に自分を活すべき筈である。又、自分の衷に、父兄を活し得る子弟ならば、決して不肖の子弟にならうはずがない。己が子弟の衷に自己を活し得ない父兄は、人間としても極めて愚劣らない人間である。從つて又、斯の父兄にして斯の子弟ありで、其の父兄を活かす事の能きない子弟の生るのも亦、當然と謂はねばならない。」

『では有名無實と云ふことがありますがそれは間違ひで無名こそ有實であり、有名は却つて無實ですかね。』

『有名は無實であると共に有相は無命で、形相は死物に決まつてゐるよ。有名な人間が多くなるほど社會は混亂し人間は墮落するし、文化運動が熾んになるほど、暗殺だの、暴動だの、無智蒙昧な蠻行凶行が流行り、合理生活が高唱力說ほど、合點

の行かない出來事が頻出するぢやないか。我國も世界から朝鮮の屬國視かの如うに見做されてゐた時分には強い生命が內部に潛在してゐたが、世界の四大强國かの如うに持上げられて來たのぢや、チト心細からざるを得ないね。』

『すると有名人物の集合まつてゐる有名な都會ほど其の實最も愚劣ない者の寄集つた愚劣らない區域ですかね。』

『だから。僕は阪神とか京濱とか稱ふ如うな大都會を思ふ毎に、それが實際一種の墓地墓穴の樣な氣がしてならない。巍峩として聳え立てる無數の官衙や學校や銀行會社などは、宛ら墓標でゞもあるかのやうに感ぜられる。眞に子を生す親も無ければ、親を活す子も無く、妻を生す夫も無ければ、夫を活す妻も無い現代の都會なる地は、嗟如何に荒涼凄慘たるものであらう。それを彼の蝙蝠飛び狐走り、雲迷ひ草生ひ繁れる墓地に較べて、果して怎れ程の差異があるであらうか、否、夫等に比べて如何に虛僞僞善の結晶であるかに戰慄せざるを得ないのである。』

二三　親鸞聖人と石川五右衞門

『時に先生！　私の知つてゐる眞宗坊主にSと稱つて鳥渡變り物がありますが、其の坊主の研究によると、石川五右衞門は親鸞聖人の末孫ださうですが本當でせうか。』

たま〳〵沈默が續いたかと思ふと、突如に謎の如うな話を浴びせてY君、凝乎と僕の顏を見詰めた。

『そら君！十惡の愚痴坊主の法然の流れを酌んだ罪業深重、煩惱熾盛の極重惡人、「如何なる惡も恐るべからず」とか「因緣だにあらば千人斬を行るのもよい」などと乾分を煽動けたりもした弱々しい强かもの、溫かさうで底冷たい親鸞は、恐さうで涙脆く惡さうで聖らかな五右衞門とは同一人の裏と表ではないか。』

僕の此の解說を慌しくY君は遮つた。

『串戲ぢやありませんよ先生、嘘にもせよ、聖人と讃へられ大師と仰がれてゐる人

間と、金箔付の大泥棒とは、蓮華と泥ほどの相違があるぢやありませんか。』
『ぢや蓮華は魚も住まない程の、清浄無垢な水の中にでも生へるのかね。』
『イヤ爾うぢやありませんが、何ぼ何でも五右衛門と一口にいつて遣つては、親鸞が餘り可愛想ですからね。』
『だが尿と赤ン坊は同じ門から吐き出されるぢやないかね。』
『はゝゝゝ仕様も無い……』
と云ひつゝ考へてゐたY君、
『人事の一切が相撲であり世相の總てが芝居であると云ひますが、基督と親鸞の取組芝居が盛行るのはまだしもですが、五右衛門と親鸞では奇劇の材料にもなりませんね。』
『それや基督は焦地に芽を出した親鸞であり、親鸞は肥地に育つた基督ではあるが業熱の地獄のドン底を破つた基督的親鸞は五右衛門だよ。』

『だつて五右衛門と豐公の關係とは、まさかピラトと基督の關係と云へませんからね。』
『ピラトと基督は三成と五右衛門さ。』
『マグダアのマリヤと基督の關係こそ五右衛門と秀吉の關係だよ。何が邪羅々々したことがあるものか考へても見給へ、五右衛門を一石八斗の油に煮た豐公の心情は、基督の足にナルタの香膏を塗込めてエルサレムと名ふ油釜へ飛び込ましめたマリヤの眞心の變形ではないか。たゞ豐公は男性的女性で、子供らしい所があり、マリヤは女性的男性で餘りに身献過ぎたのと、時と場所との關係から緣に順逆が生じたまでだ。併し、基督の十字架に上げられた時には、弟子は皆逃げ隱れて居なかつたが、五右衛門が湯灌の刑に處せられると聞いた十二乾兒は「親分と一緒に殺して吳れろッ！」と我を爭うて刑場へ馳付けたし、「自分を殺して無德道人さま（五右衛門の號）をお助け下さい」と、生命の取換を强請つて出た者が、何千何百人あつた

か分らなかつたと傳ふのに徵ても、情義の厚く涙の熱い點に於て、基督は屈んで五右衞門の草鞋の泥を落すにも足らないよ。而も況んや和國の耶蘇親鸞をやである。』

『先生は罵ることは生かすことだと仰在つたが、それにすると餘程、親鸞がお好きと見えますね。』

『さうだ。親鸞も元祿には巢林子と名を改めて出直して來たが、桃山時代には五右衞門と名乘つてゐたからね。』

二四　五右衞門とイエス、キリスト

Y君は態度を改めて、『爾う承はると然うとも受取れますが、五右衞門の「石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盜人の種は盡きまじ」の辭世は、親鸞の「われ逝くも法は盡きまじ和歌の浦、　靑人草の盡きぬ限りは」の辭世を眞似たのぢやありますまいか。』

『所謂兩極の一致で似な過ぎるものは却つて似た如うに見えるものだ。五右衞門の辭世は、無限深甚の懺悔のドン底の悲鳴だが、親鸞の辭世は高慢稚氣の絕頂から聞える誇聲ではないか。平末鎌初にしろ、足末桃初にしろ總て戰國時代と云ふものは、謂ふまでも無く盜賊萬能時代であつて、天下を私せんとする大盜、國を奪はんとする强盜、財を掠めんとする小盜の全盛期だから、非盜非賊の困難は一通りで無い。謂はゞ現世の儘地獄に墮ちてゐる譯だ。然し人は人に依らねば救はれず、毒非盜非は毒に憑らねば除かれない。天下の小盜を糾合して大盜、强盜の財を掠奪せしめ、賊の窮乏を救つた五右衞門は謂はずと知れた賊に潛れた高僧だ、神の名を騙つて人を迷はす不良中年、精神泥棒の基督や、佛に隱れた極重惡人、本願泥棒の親鸞などとは裏表だよ。』

Y君は、怪訝な眼を睜つて、僕の顏を注視めた。僕は一息入れて、

『嘗て僕は五右衞門の墓に詣つた時、花を供へやうとして考へた。「待てよ！五右衞

門の墓に供へる花は盜む方が可からう』と、豪農の自作と聞いた畑から、今を盛りと咲き匂へる菜種の花を聊か失敬しかけたが、背後に足音がしたので悸乎としたよ。單身伏見城へ忍び込んで豊公の素ッ首を引抜かうとした五右衞門の膽氣の程が思ひ量られたね。老子の「慈なるが故に能く勇」を偷んだか否かは知らないが、「仁者は勇あり」と孔子の曰つたのに徵ても、五右衞門が如何に慈悲深き仁者であつたかが推測られるぢやないか。而も彼れ五右衞門は秀吉の寢所に入つて千鳥の香爐を蹴散らかしたが寢返りしながら目の覺めぬ豊公の顏を見て、「恁麼漢を殺すのは寢鳥を刺すにも劣つた無益の殺生だ。否、乃公が手を下さずとも既に魂は死んでゐる。生きた秀吉は他所に在らう、主君信長の天下を横奪して糟糠の妻を離縁つて淫婦を娶り、如何に成上り者の常習とは云ひながら驕奢を極めて、民の膏血を茶釜に沸かし、華に見る横暴無殘の白痴漢、我欲の爲に幾萬千の人を殺しながら、羽虫一匹助けやうとは思はぬ奴なれども、秀吉はまだ幾人あるか分りやしない、といつてせんぐ

り〳〵殺しても果しは無からう、千古萬古、世盜人は絶えやしない」と寢所を出ながら更に考へた。「幾ら思ひ返しても人間は泥棒だ。娑婆は地獄だ此の世は修羅の巷である。恐るべきは人心、懺悔すればするほど惡心の增長する己れ憎きこの己れ！」と、我と吾が惡心に戰慄きながら、千人組の頭だの百人組の棟梁だのと威張つてゐる千石權兵衞とか薄田隼人など云ふ子供らしき大供の頭を蹴り飛ばし足を踏み躙つてコロ〳〵四邊に寢轉んでゐるガチャ蠅の胴眞中へ我と吾身を抛げ與れて態と縛せしめたのだよ。等しく泥棒扱ひを受けたにしても、全地の人に成代つた甚深無限の其の懺悔は、彼の十字架上に失望の悲鳴を放つた耶蘇の心事とは雲泥の差ではないか。まして耶蘇に眞似んだ親鸞などの梯子しても及ぶところではありやしないさ。』

『五右衞門の墓は何處に在るのです？』

『河内國石川郡葉室村に在るのだが、實は五右衞門の腰掛石なのだ。此の春の事である、僕は聖德太子第二回千三百年御遠忌に詣でんと法隆寺驛に汽車を棄てた。そ

して今猶班鳩宮の面影を偲ばせる河泉の峰巒に引摺られて何だか推古臭い四邊の風趣に引付けられて法隆寺道を辿つてゐたのだ。すると踏切を越えた道傍に巨大な石碑が澤山整列してゐるではないか。「木村長門守表忠碑」「眞田大助義勇碑」「塙團右衞門武勇碑」などゝ彫られてある。僕は此を見て、世界は何時の時代でも青年の舞臺である。エポックメーカーも青年なら、犧牲者も青年であるなどゝ定り極つたことを、今更の如うに感じたりもした。然し「楠正成頌忠碑」「楠正行精義碑」などの碑もあるので、「和氣清麿純忠碑」とか「平重盛忠孝碑」は在りませんか。』

と訊いてやると、

『其碑や未だ拵へてゐませんわ。』

石屋は眞面目だ。

『高い處へ土持と云ふことがあるが、餘りに豪過ぎ、忠義過ぎ、賢明過ぎて人間放れがしかけてゐる斯うした人の碑を拵へるのは蛇の草鞋を拵へる如うなものぢやな

いかね。』

僕が揶揄ふと石屋もさるもの、

『無理にくつ付けられた蛇の足へ履かす草鞋か知れませんが、能う賣れますさかいな。』

と御座らつしやる。說ふまでも無く此處は石屋の陳列場で、前記忠臣義士の碑は何れも廣告塔の仕入品だ。中には既うチャンと何市何町何丁目何々商店などゝ品名からマークまで彫添へられたのもある。曰くマルクス、曰くクロポトキン、曰くラッセル、曰くシユライエルマッヘル、曰くアインシユタイン、曰くダヌンチオ、曰くゴーリキイ曰くたれ、曰く夫と緣も由緣も無い異邦人を看板に擔いで元手要らずの不勞利得業が流行する今日、投資有勞業者が自國の先人を廣告に用ゐるのはまだしも罪が淺いのだが、法隆寺其物が、さうした無資不勞利得業者の勞業場であるかの如うな心地がして來て、聖德太子に對して御氣の毒な感も生つたし、太子を憶ふの情は

一層深くなつただけ、それだけ法隆寺に詣づる勇氣を喪つたのだ。』
『イヤ如何にも楠公などは餘り潤色が過ぎてチト厭らしくなつたですね。』
『だから寧そ「楠正成滅忠碑」でも建てゝやると可いのだ。それに「玄昉僧正雪艶、否、雪冤碑」とか「足利尊氏滅罪碑」なども必要だし、同じ南河内に「弓削道鏡」も在るしなあ。』
『イヤ御尤です。何せ河内の人間は、楠公に對する怨が骨髓に徹してゐるそうですからね。御承知の通り河内は名勝古蹟に富んでゐますので、遊覽客が多いやうですが、名士、名將、名門、學者、識者はもとより多少名の知れた人が遣つて來ると、定まつたやうに學校で講演を行る。又それを土地の者が聞きに來ねばならぬやうな運びをつける。そして其の講演が申合せた如うに誰も彼も口を極めて楠公を讃美し咏嘆し、謳歌し、激賞するに極まつてゐるさうです。聞き度くもない話を二度聞かされるより、一思ひに殺される方が優なやうな心地のするのが人情ですのに、父兄同

伴といふ註文に餘義なくされて己の在校時代に幾度とも知れぬ位聞かされたのに、伴の同時代、孫の同時代と三時代續いて苦聽させられた連中もあるさうだからね。』
『だから眞の基督信者は教會や寺院などは、見ただけでもぞーつとするぢやないか。』
『しかし先生は其の時法隆寺詣でを中止られて磯長へ廻られたのでせう。』
『所が太子口驛を降ると、イの一番に目に觸いたものがある、それは「大阪松島仲之町何々席」と云ふ女郎屋名前の碑文だ。深彫にして墨入りと來てゐるから誰の目にも注き易いが、上の方に喜美の二字が續いて目に觸いた、女郎の源氏名かと思つて見ると俗書家の名前である。しかし肝心の「聖德太子御廟」が墨入らずと來てゐるから一番目に觸き難かつた、それに「東二十町」の指道文字は横脇に彫られてゐるから、餘程拍子の好い人だと御廟からの歸りに目に觸くかも知れない。怎の道、折角の參詣者があらぬ道へ踏込まないやうにとの慈悲心から建てられた「道しるべ」

でがなあらうが、僕は何だか又、太子廟が女郎屋に化つたかの如うな心持がして來たので急に詣るのが厭になつたのだ。』

『それで磯長詣りもお中止になつたのですか。』

『中止さうと思つてゐる所へ、突如に梶棒を僕の前へ下して、切りに叩頭する車夫があるのだ。』

『一つも仕事が御座いませんのでシケて居るのです。其の癖若い者は仕事に逐はれてゐるのですが、斯う年を取ると饒張りあきません。それに此節のお客さんは俥の綺麗なのを選りやはりますのでなあ。』

と愚痴るのも道理。能くもまあ此の身體で俥が輓けたものだと思はれるほどの傷々しい感じがした。

『イヤ實は詣らうと思つて來たけれども、見合はすんだから……』

と小札を一枚與れてやると、

『たゞ頂くのも何ですし、折角此處までお越になつたのなら、一寸御參詣になつたら如何です。』

車夫は切りに勸め込む。僕はたゞ賃金を取らせる爲に乘つたが、俥が四五丁東へ進んだ頃、

『既う此處で結構……』

と命じた刹那、俥は只ある大きな橋へ差蒐つた。

『此河や金剛山から落ちて來る石川だね。』

何の氣も無しに僕が斯く云ふと、

『え？』

と覺えず振向いた車夫公の目は何かしら異樣に輝いた。

此の時僕は不圖、本朝武功正傳や燕石十種の「三好氏の臣、明石の子、始め眞田八郎と稱し遠州濱松に住す、後故ありて河內國石川郡山內古底と云へる醫家に依り、

遂に石川五右衛門と改む云々」の五右衛門傳が思ひ出されて來たので、
『慥か此の邊に五右衛門の住んで居た村がある筈だが……』と訊くと、
『旦那！えらい事を御存知ですね。實は私宅の村なので……』
後ろ向いて斯う答つた老車夫は何だか後ろめたいやうな顔相をした。
『君村は何村かな。』
『ツイ此處から六七丁東南に當る葉室村と名ふ小在所ですが……』
『ちや俥を下して下さい。』
『何故で御座います。』
車夫は俥を停めて僕の顔を凝視めた。
『太子樣の御廟よりか君宅の村へ行きたいから……五右衛門の住んで居つた其の葉室村へ參詣したいのだ。』
『御戯言仰在つちや困りますよ。打明けて申しませうと、私共も五右衛門の爲に迷惑

してるのです。俥賃を申上げるのにも大泥棒の住んで居つた村の奴だけあると思はれはしないかと思ひまして高いことを申されず、增賃をお願ひしても可い時でも口まで出かゝつて云へなくなるのです。同じ南河内でも、太子樣の御墓所のある村や楠木さんのお生れなさつた村の人間に比べますと、まことに肩身が狹いので御座います。おや旦那！怎うかなさいましたか。』
老車夫は氣遣はし氣にたづねて呉れた。僕がポロ〳〵涙を滲したからだ。
『それや又、怎ういふ譯ですか。』
Y君は奇有鋭い聲を出した。
『怎ういふ譯で涙がこぼれたか自分にも分らなかつたよ。』
『心齋橋か戎橋の上だつたら黒山の如く人が群つたでせうね。はゝゝゝ』
『そらX光線ではないが寶石や金ばかり見えて、人間の見えない目の持主や、衣服と生殖器しか見えない人間には分らぬ消息ぢやからなあ。』

『己が村から出た、五右衛門が大泥棒だつたのを、今に悲しむ車夫の心に同情されたのでせう。』

『それに、泣いて〳〵泣き潰した目には道傍の小石にすら惹付けられると云ふが、生活苦闘に流した涙汗の染込んだ襤褸法被に包まれた車夫の、自ら覺らずして先人が犯した罪を代つて懺悔する至高き心の光を驕飾の衣を透して僕の慢心を射貫したからね。俥を其所の茶店に預けさせて、參詣者で賑やかな磯長道を、葉室村へ向ふべく徑道へ外れた車夫と僕の姿は、道行く人に怪訝な眼を睜らせたかも知れないが僕は實際其の時、此の老車夫を背垂負うて五右衛門先生の遺蹟を訪ねたくも思つたよ。』

『葉室村に五右衛門の邸跡でもあるのですか。』

『其邸跡は、分つて分らなかつたよ。何故つて君！「此村に五右衛門が住んでゐたのですか」と質くと、村人は申合はせたやうに何れも沈默と云ふ自白を行るが、「

其の住家の跡は？」と再問すと「知りません」と應る。たま〳〵「彼の家」ですと教へられて其家へ訪ねて行くと「私宅とは違ひます」と刎ねつけると云ふ爲體だからね。』

『案内の老車夫は知つてゐるのでせうにね。』

『所が、村へ入ると車夫は姿を消して了つたよ。』

『餘計なことを話つて知らぬ人を村へ連れて來たことを村民に對して濟まぬとでも思つたのでせうよ。』

『爾うした譯だから僕は村中を軒別に尋ねて廻つたけれども、結局要領が得られなかつたが、村民の總てが何となく羞含んだ如うな素振をし、氣兼らしい顏相をするのが、僕をして不圖十四時間の勞働時間で日給平均四拾錢とかに誰一人不平を言ふものも無く、廉衣廉食に甘んじて、默つて働いてゐる敗殘の民、偶〳〵來遊の外人が白パンを與へても、「イヤ折角ですが、折角數年間、黑パンで凌いで來ましたか

ら……」と厚意を受けて其物を受けないと聞く彼の獨逸國民の現狀を聯想せしめたよ。』

『併し。葉室村の人は先生を氣狂ひかと思つたかも知れませんね。』

『そら僕は何村へ入つても、斯樣な蓬頭だから、「大本敎が來よつた」とか、「イヤ八卦屋だらう」とか「田舍廻りの講釋師かも知れん」とか「ナーニ下手糞の浮れ節だ」「さうだ何處か場末の席で見たことがある」とか罵つて若い者は惡弄する、其處等邊に游んでゐる子供でも「うえ！」とか「わはゝゝ」とか罵つて、見世物か何かのやうに逃げ腰で跟隨て來る。中には「それ早う泣き止まぬと、彼の化物見たいな人が攫つて去によるぜ」と、泣く子を賺す道具に使ふ女もあるが、葉室村へ入つた時は、彼方此方から子供が大勢僕の傍へ集つては來たが、村民の心の殿堂に祠るとゝ無く祠つてゐる、謂はゞさうとは覺らずして村民の總てが精神的に氏神としてゐる五右衛門の末裔かのやうに、思ふとも思つてか、何かしら懷かしさうな顏相

をして默つて跟隨て來るのだ。』

『併し、先程お話しの五右衛門の腰掛石は？。』

『其石は其村の小山の絕頂の畑の傍に在つて二三の人家も近くにあるが、其處等一帶が法樂寺と稱ふ寺と五右衛門の屋敷跡だと云ふものもあつた。華山院法皇の御座つた佛眼上人の佛眼寺も近くであるとか。元來五右衛門は淸和天皇の後裔、八幡太郎の三男、石川左兵衛尉義時の末葉とかで代々此地の豪族だつたと傳ふことだ、そして父の明石は正直正路の一刻者で、伜が盜賊になつたと聞くなり割腹し、其の妻そよも咽喉を突いて夫の後を趁うたとか。葉室村の東方に岩屋越と稱つて頂上に岩屋の在る峠がある。其處に五右衛門は五輪の塔を二基建てゝ兩親を弔つたさうである。五右衛門の齒塔と云つて今日殘つてゐる。小さな塔が入口に在る別の岩屋が其の遺跡であるとか、齒塔は母塔の轉訛らしい。其事は兎に角、僕が五右衛門石に持參の香を炷いて三部經を誦げて了つて振返つて見ると、何時の間に來たものか皆

後は人で埋つてゐたのに驚いた。そして咳拂ひ一つしないで靜肅に謹聽してゐたのかと思ふと、心の底から涙が溶れたね。それに又、驚いたのは、僕が恭しく禮拜して其處を去らうとした時、圓形の鬱林が正東に蒼凄い、推古天皇の御陵山であるとの事。數丁北の山麓に見えるのが磯長の御廟叡福寺だなと思ひながら、見るともなしに見てゐると、又御陵らしい深林が遙かの東北に仄見える。孝德天皇の御陵であるとの事なので、南方はと見ればこれはしたり又々御陵らしい山がある。欽明天皇の御陵であるとか。勿體なくも爾うした諸陵に取圍まれた、今自分の佇てる此の山は何だか其陵等の遙拜所でゝもあるかに思はれたが、更に西方へ眼を轉ずると、日は將に沒せんとして赤々した夕日射しが恐ろしい黑い森の彼方に、毒々しい血を吐いてゐるかに思はれる。脚の下から響いて來る鐘聲は、宛ら地獄の油釜が煮えつゝあるかに聞きなされて、五右衞門が釜入當時の心情が偲ばれたよ。强者に虐げられて飢渴に泣ける弱き者に、與へんと欲するも麵包有たぬ悲しさに「人は麵包のみ

にて生くるものに非ず」と、耶蘇が慰めた如うに、「恐い〳〵夢と思うて居よ」と煮え繰返る熱油中に衝ッ立つて兩手に差上げてゐた一子五郎市を慰めた五右衞門の心中が偲ばれて、腸を抉ぐらるゝの感がしたよ。五右衞門二十一二の頃に降つても照つても、毎日朝晩に此石に腰打掛けて、初ッ中冥想に耽つてゐたとか傳ふことだが、荒野に彷徨ふた當時の耶蘇の心が聯想されて、徘徊去るに忍びざるものがあつた。』

『可惜五右衞門は、其處で成道ではない成盜したのですかいな。』

Y君は冷評氣味に斯う曰つた。

『兎角、現はれた美しさばかりに目をつける君は、眞の美の醜さものゝ奥又奥に輝いてゐることが分らないのだね。戰國時代とは善惡兩極端を抱擁する特殊の天才を生じた時代である。而も撥亂反正の善衣を纏うて私心を逞ふし自家の繁榮を圖つた豐公と、盜賊の醜衣を被りて社會奉仕に一身を拋つた五右衞門とは、その兩極

の表裏を爲せるものではないか。俗世間を救はんか、靈界の光たらんかに久しく惱んだ基督が、時世と境遇に鑑みて、遂に俗的救濟を棄てゝ靈的救濟に邁進した如く五右衞門が天下一統よりも寧ろ萬民の生活難を救はんとしたのは、畢竟時代と境遇に鑑みた結果であつたのだ。賊に潜れた出山の五右衞門と、乞食に潜んだ出山の釋迦と、共鳴同感して一體になれる消息が分つて分らないやうだね。それに又一切から棄てられて、語るべき一人の知己だも無き限り無き寂しさに、消え殘る星を歌ひ沈む夕日に思ひを寄せて、雲に何かを言傳てたり、石を褥に樹木や草花と語合つてゐたその寂しき面影が、何だか和蘭　ドールンの、カイゼルを聯想させるではないか。』

『併し、五右衞門などゝ云ふ如うな傳奇的人物が本當に居つたとは思はれませんね恐らく稗史小説家の產んだ戲曲人物でせうぜ。何等文獻の徵すべきものが無いぢやありませんか。』

『それ聞いて僕は安心したよ。何故つて君！親鸞抹殺論者は數へきれぬ程あるのに五右衞門抹殺論者が一人も無いので僕は彼の爲に心配してやつてゐたのだからね』

『先生にそれだけ追慕はれたら、五右衞門以て瞑すべしですね。尤も彼の謹嚴な杉浦重剛翁なども、非常に五右衞門を崇拜されてるさうですが……』

『だから大鹽中齋先生が阿波の十郎兵衞は西行法師の轉生だといつて崇拜されてゐた如うに、カイゼルも亦何人かに依つて禮拜される時が來るだらうよ。』

『然し、此間撫養へ行きましたら、例の十郎兵衞松の殘つてゐる十郎兵衞の邸跡は或る成金が買取つて、紋も型も無いやうにしてゐましたよ。』

『それも可いさ。今でこそ、阿彌陀ヶ峰の豐公廟は立派になつてゐるが、僕等の子供の時分には、根こそぎ取拂はれて石階の斷片一つ無かつたものだ。五輪塔も榛莽に閉されて犬の子一匹行かなかつた、否、行けなかつた、否、否、行かれぬやうにされてゐたのだ。何せ叡山の麓に在つた日吉神社を擔いで來て强いて登山口を塞い

でゐたからなあ。併し、僕が荊棘を踏んで漸つと崩壊れてゐたその五輪の塔の邊りへ行つた時、秀頼の怨みの籠れる君臣豐樂餓家安康の銘ある彼の大佛の鐘聲が殷々として響いて來たので、僕は子供心にも、日光を見ないで結構と云ふなとさへ讃はれてゐる日光廟が怪火に燒けねば可いがと心窃かに心配したからな。秀吉が豐國大明神として祀られるやうになつたのも、さうした虐待の反動なのだ。僕が彼の東露のエカテリンブルグで一家慘殺の憂目に遭つたニコラス二世の遺臣によりて新しく念佛宗が生み出されると謂ふのも其處だ。遺族の悉くが斑鳩宮で鏖殺にされたればこそ聖德皇も我國の釋尊たり勝鬘夫人たり維摩たり得られたのではないか。』

『イヤやがて五右衛門も救世主として全地の人に仰がれる時が來るでせうよ。』

『其の時には今日巡禮者の絶間の無いバレスチナの耶蘇の聖跡は、犬の子一匹迂路つかなくなるであらうから、其處に行つて麥の穗でも偷んで供へてやるものがあるだらうよ。はゝゝゝ』

恁麽話に僕Yが夢宙になつてゐると、ヒョーと虚空に音がして、グワラ〳〵と物干棹が衣服と一緒に降つて來た。Y君が一寸障子を開けた拍子に、忽ち一陣の天颱が室内を襲うて床の間の軸物を振り動揺がし、高卓に立てゝあつた黄楊の木像が轉がり落ちた。木像は中齋像で、軸物は中齋の筆になれる七絶である。慌しく木像を起して呉れたY君、何を思ひ出したのか磴と膝を打ち、

『おゝさう〳〵、六甲山に大鹽中齋の墓があると云ふ者がありますが本當でせうか？』

と言ひ出したので、僕は忽ち全身に冷水を浴びせかけられた如うに慄然とした。

『君！それや誰が其麽ことを云つたのかね。』

覺えず目を睜つて斯う問ふた僕は、殆ど夢心地であつた、久しく行方を搜し求めてゐた父母の便りを聞くかに思はれたからである。驚に攫はれた我子の行方を、三十年間も搜し求めてゐた良辨僧正の母親が淀川下りの三十石で、良辨僧正の經歴を聞

いた當時の心も斯くやと思はれて、僕は涙ぐましい心地がして來た。

二五　六甲山靈の使者

Y君も不思議と緊張して

『實は先生！斯うなんです。此間一寸した用事で六甲山腹の船坂村へ行きましたら豫て知つてゐる虎公と名ふ獵師の話に、「或年の冬、猪を逐うて唐櫃六甲の森林を突つ走つてゐると、不圖大きな墓が目に觸いたので、變に思つて目標の爲・枝折を作つて置いて翌る朝、更めて見に行つたが、何ういふものか、幾ら探しても見附らぬので、狐にでも魅まれたのではないかしら……」と、變な氣になつたさうです それから既う四五年も經つので、スッカリ忘れてゐたのに、昨日小櫻巳之吉と云つて、永らく船坂に來てゐる山働きですが、その男が、「大幽平八郎の墓を見つけたたしかに見つけた。」と豪さうに叫つてるのを聞いて、その獵師が前言つた墓の事を

思ひ出し、「斯々いふ格好の、背の高いかうした墓であらう。」と聞きますと、「全くそれに違ひない！」と應ふ。それでモウ一度二人連れで、見に行かうと言つてましたが……』

Y君の話を聞いてる間、例の幻像は鋭く僕の腦裡に復現した。その幻像が宛も神來の默示であるかの如く思はれてゐる矢先き、其處に中齋の墓を實見したと云ふ二人の證人があると聞かされた僕には、もう寸毫の疑惑も無かつた。

『そら君！佛壇に佛像があるのは當然ちやないかね。』

『しめた！』と思ふ心を顏色にも出さず、おさまり返つて僕が斯う曰ふと、

『おや爾麼に確實なのですか。』

『確實な所か、池田北裏、多田村の滿仲院に滿仲の墓が在り、箕面在の萱野村に萱野三平の墓が在るのよりも、阿波の里浦に淸少納言の遺蹟のあるのよりも、字治の猿丸に猿丸太夫の遺跡があるのよりも、大阪下寺町生玉下の淨國寺に夕霧の墓があ

り、櫻之宮の大長寺に小春治兵衛の墓があり、中寺町五丁目妙法寺に近松の墓があり、上本町五丁目の誓願寺に中井履軒や井原西鶴の墓があるのよりも確實だよ。』

『さうですか。私は大鹽の事など、餘り知らないものですから、可い加減に聞いてゐましたが……イヤ成程、さう承はると、思ひ當ることがあります哩。御存知かも知れませんが、生瀬から船坂へ登る彼の「大多田川」の上流に、「御前濱」と云つて、相應廣い一區域があります。恰度去年の今頃ですが、私の知つてる男が其處から錆びた刀の折れッ端や小欄なんか拾つて來ました。鑑定の結果、それは格別舊い物ではなく、七八十年ぐらゐ土中に埋もつてゐたらしいと云ふ事でしたが、或は大鹽一味の者が其處等邊に隱れてゐたのかも知れませんね。』

『僕が若い時、神戸の摩耶山から唐櫃六甲へ廻つて唐櫃村へ降つた時、彼村に慥か人皇二十八代正親町天皇の御宇に、退蓮社轉譽上人とかゞ創開いた一心山專念寺と稱ふ淨土宗の寺があるが、其寺から南方半町餘りの山中に赤松圓心の墓を見たが、

何處に何う云ふ人が死んだか分らないものだよ。』

『さう仰在るとまだ妙な墓がありますよ。先度京都へお伴しました時に、花園の妙心寺にも武田信玄の墳墓がありましたが、例の船坂から西之宮へ越える途中、右手の方に、昔、吉利支丹婆が居つたと傳ふ鷲林寺と名ふ、可なり由緒の深い眞言寺があります、附近に十數戸の人家もあつて鷲林寺村と稱つてゐます、斯の村から五丁ばかり離れた竹林中に武田信玄の墓があると聞きまして、船坂から伊丹へ越しがけに、恰度途中ですから見に行つた事がありますが、信玄よりはズット時代が新しく私の見た所では怎うも天保以後の墓だと思はれました。變な戒名で俗名は愚か年號も何も入つてはありませんが、武士の墓には相違なさゝうです……』

無心に語るY君の單純な斯うした話が、僕には非常に強いチャームであつて、宛ら、六甲の山靈が此の青年を遣はして、僕を招いてゐるものゝ如うにも感ぜられるので、

二六　そよとの風の便りも無い

『Y君！僕は實は少し心當りもあつて、豫て六甲に中齋の遺跡を探らうと願つてゐたのだ。今日君が來て這麽話をして吳れたのも、僕には全く偶然とは思はれない。怎うだ、これから一緒に探檢に出かけやうぢやないか。何事だつて思ひ立つた時に行つてのけなけや、行る時はありやしないからね。厭でも附合つて吳れ給へ！賴むから……』

と委細巨細云はせぬ了見で、僕は早速準備に取掛らうとすると、Y君は面喰つたらしく、

『先生！あなたは本當に中齋の墓が、六甲に在ると信じてゐらつしやるのですか？』

『さうだとも！』

Y青年は今更の如うに驚いて、

『實は御戯言だらうと思つてゐました……併し此頃山は寒うおまつせ……』

『だから雜草も枯れ木の葉も落ち、蝮や毒蛇も出なからうから、搜し能くもあり、安全でもあらうぢやないか。』

『それでも猪や山狗がソロ〳〵迂路つき出す頃ですからね。』

『ナーニ髯を生やした猪や、白粉を塗つた山狗の群つてゐる市中を彷徨くことを思へば、怎れだけ安全だか知れやしないさ。』

『併し、無智蒙昧な山男や獵師の云ふ事ですから、アテにはなりませんよ。』

『だが有智賢明な都會人や文化虫の云ふ事よりも確實だらうよ。』

『打明けて申しますと、六甲深林は不思議に行方知れずになるのです、ツイ此間も中學生二人が今に行方が知れないのです、知らぬ人は何でもない山やと思うてゐますが、平凡に見えて事實六甲山程奥底の知れない怪つ體な山はないのですからね。』

『だから中齋先生が潛伏地に選ばれたのだよ。墓が今まで分らなかつたのも無理は

無いさ。」

『併し、見つかるか怎うか分りませんよ。』

『見つからないと云ふことを見付けるのも亦一つの見付け方だ。失敗は發見の別名ではないか。印度を目指したコロンブスは印度に數倍する亞米利加を發見したぢやないか、亞列比亞の煉金術は失敗に了つたが、目的の黄金よりも尊い科學の萠芽が發見され、數學の三角術の發見は、彼の無用の長物ピラミットをこしらへたお蔭ぢやとか云ふことだ。總ての發明發見は失敗の直系的産物か若しくは副産物ではないか。』

『それにしても何だか徒勞に終りさうな氣がしますね。骨折損の疲勞儲けになりさうですよ。先生も何日だつたか。「外で不時災難に會ふのは出しなにわかる、不結果に終る仕事は、着手の刹那に不安を感ずる」と、仰在つたことがあるぢやありませんか。』

『所が、失敗や禍失は失念亡慮の極に發生るのだ。不結果だと思へば不結果は來ない無効だと覺悟することは無効を免がれる禁厭になるものだ。何、墓が知れたつて何になるつて、そら無駄といへば我々が斯うして生きてゐるのも無駄であるが、君は先程密敎が何うの斯うのと曰つてたが、山河草木が不二曼陀羅の相と知らないのか、土に石で書いた易經を見ないで、黄卷赤軸が何にならう。書物は人間を透した自然の寫眞に過ぎない、佛敎などゝ云ふものも、偉大なるヒマラヤの嶋峰を象徴したのに過ぎない。大日覺王佛の懐ろに入るとは山に入ることだ、彌陀淨土とは山上からの見晴しに過ぎない。山河は畢竟陰陽兩界、風雲流水も不二梵音の響に他ならないのだ。禪門の寶典たる碧巖集も野鶴を啣んで碧巖の前に降り、白猿兒を抱いて青嶂の奥に還る豐州の叙景詩ぢやないが。山は實に秘密莊嚴殿である。風の梁雲の帷、胸裡の硯に心の筆もて描き來る曼陀羅ではないか。身、口、意、の算木を抱いて萬物の大玄門たる大虚阿字の中に入らうではないか。市山不二、猿人一體の

密機を知らずして眞言も易もあるものかい。況んや佛敎をや神道をやだ。』
『ですが五右衞門の持つてゐた忍術の奥義書には氣の進まぬ時に身を隱すと罌粟粒を須彌山に隱すことも難かしいとありますよ。』
『だから、それほど進まない氣を進めると、蜆貝で大海を汐干して底に沈んだ如意珠を拾ふことも能きるのだ、中齋先生の墓どころか、新しき龍經を見出して潰れかつた世界を一夜に改造することが出來るよ。』
『併し、私はそんな無駄は御免蒙りたいので……』
『しかし無駄が無いと思ふ心ほど無駄な心はありやしないよ。君は以前何と曰つた
「二十年間學校敎育は受けましたが廢めて初めて無駄であつた事が分りました」と曰つたのを忘れたかな。又何か非無駄な無駄を行つて居ると見えるな。可惜一生を其麽に無駄にして了はずと、二日や三日、無駄な非無駄に手傳つたつて可いぢやないか。』

『イヤ其の邊の消息は能く解してゐますが、「捜す時に、物は見付からないものだ」とも仰在つたぢやありませんか。』
『それや或は捜す對者は見付からないかも知れぬ。縱令それにしても嘗て捜して見付からなかつたり、聽て捜さねばならなかつた物が見付かつたりもするものだ。兎に角、行かんが爲に行けば可い、捜す爲に捜せば可い、學問をするにしても、學問の爲の學問なら後で悔ゆる筈も無い筈だが、他に何か功利的な目的を以てかゝるから後悔するのだ。親鸞の言草ではないが無意義といふ意義ほど、眞實な意義は無いからなあ……。「無益に働いて、そして無益に死ぬやうな宿命を有つてゐる」とラスキンが天才藝術家を謳つた眞意も其處にあるのだ。「先師の靈骨猶存す」と大原ノ孚は曰つたが墓どころか、僕は中齋其の人に會へると確信し斷言するね。若しも會へなかつたら此劔を渡して置くから此劔で僕を突殺すが可い。』
と、中齋先生の靈前に供へてあつた葵正宗の白鞘の短刀を渡してやると、

『イヤ爾う云ふ事でしたら是非お伴をさせて頂きませう。しかし一寸歸りまして待つてゐる來客を歸して先刻お話致しました獵師や山男とも申合せ近い内に更めて必度お誘ひに參りますから……』

何故かY君は斯う云つて、匆惶として、辭し去つたのであつた。

今日來るか、明日來るか、僕は正直に彼れの言葉を信じて、準備を整へ、ロクすつぽ外へも出ないで、待つて〳〵待ち貫いたが、大正辛酉の年もいよ〳〵大晦日と押詰まるまで、Y君は終に來て呉れないのみか、そよとの風の便りも無く、手紙を出しても返辭すら來ない。

二七　半生の夢

日は去り日は來り、曙の色を染め出す彼の櫻花に對し、此の紅葉の夕榮を織出してゐた霜の機は、反返る千葉朽葉に切刻まれ、野山を剝がした金風も、凍天の荒礪に

鍛はれて骨を徹す寒颷の刃と化つた。縷々として消え殘る香煙を偲ばせてゐた殘菊も何時しか消えて、晩秋初冬の屍も哀れ嚴冬の塚穴に葬られ了つた。

回顧すれば此の一年、まだ覺め果てぬ夢一場と過ぎ去つて、何一つ取止めたこともしてゐない。驢事に驅られ馬事に逐はれて、理由も無く心身を疲憊、困迷せしめたゞけの事である。而も何等の快心事にも接し得なかつた。更に過去半生を溯想して見ても空々漠々、夢より儚く過ぎ去つて、殘るは悔恨と悲痛の涙ばかりである。我、今、人生の峠に立ちながら轉た煩悶するも、日は暮れなんとして罪業の重軛の持重りに死道路喪道路の爲體。而も何方に向つて進むべきかを知らず、たづねんとするに人も無く、さりとて神の手引に任すべく、毒魔の禁縛より脱出る勇氣が無い。時には激昂して全地を無にして殺し呉るゝ方法もがなと、子供らしき惡戯に苦心慘澹、可惜幾夜を徹すこともあるが、しかしそれは云はふ樣なき不安な思ひを抱きながら、生きんが爲伸びんが爲に遣る瀬無き不平鬱憤を抑へに抑へて疲れ切つた心の奥底から湧上つた無

限甚深の呪詛であると共に、餘りに生活の興味を失ひ、而も野心と欲望の埒内に蹰躇したる結果であつた。

自ら希はざるに此の世に出で、欲せざるに茲に在るの我、其の爲し來りし所、我れ自ら爲さんと欲せしにあらず、倣ふとも無く他に倣ひ、倣はさるゝとも無く他に倣はされてゐたのであつた。己れに取つて無意義の生存なりしと共に他に取つて最も無益な人間であつた。眞劍ならざりしに非ず、眞劍過ぎたのである。然り、人の目には眞劍の極であつて神の目には不眞面目の極みであつたのだ。一廉生死を超越した了見でゐた時も、竊に思へば事實を超越してゐたのであつた。夢と知らぬ夢、夢の中の夢であつた。

二八　我と無明と

然し夢に夢見る僕の目にも、虚榮に莊嚴され、享樂の光り目眩き金殿肉樓は、罪惡

の陰影を秘めて、蒼い氣息と動い汗の混苦理土を礎石に、傲然甍を並べ、食鐵獸や食煙鳥、其他の食民的惡獸毒鳥の翺翔し、突走る絶緣狀や、衝當る鎧貫しや、强請る短刀や、レッドグラフや宣言ビラの往來ふ都會、自動臀者や、物言ふ春畫フキルムや、怒る督促狀や、笑ふ領收證や、呟く鶴嘴や、怨むハンマーの充滿てる無智と迷信と無氣力と暗黑の大都會は、宛ら噴火山頂の闇に演ずる鬼女の大舞踏會かに思はれる。勿論それは我に讃美の磁石無くして彼に慇懃の鐵情あらんやで、呪ふ對者に咀はるゝは鏡の影を映すに等しく、視ることを司る眼も眼みづからを視る能はざるものか。併し己が滿面の墨痕を覺らずして、他の脊中の塵を嘲る人心。呪詛と侮辱と嘲笑に渦捲かれつゝあるの僕、また孤憤の涙無きを得ない。おもへは人間は惡業の結晶だ。

而も況んや天日光を失ひ、神佛悉く毒魔と變じた暗黑の地極の底に陷つて、人知れず憤涙の泉を迸らせる世にも悲慘なる僕をやである。僕が世事を拋つて絶えず一事

に狂へるは、斯うした甚深無量の苦患より脱れたさの餘りであるが、馬嘶いで馬應じ牛鳴いて牛應ずるものか、惱める人、慨ける人、狂へる人の多くを招かずして招き、期せずして會ひ、水の水に合して其の流れを大にし、火の火に連つて其の熱を熾にする如く、斯くして苦患の劒は益〻、深く髓を徹し、憤涙の泉は、彌〻、深きを增し來るほど、内なる自己は更に〳〵人に離れて、たゞひとり底知れない眞ッ暗闇へ沈んで行くのは何故であらうか。

二九　地獄現前

つら〳〵世態を按ずるに、道義の頽廢、信仰の絶滅は更にも云はず、何敎何宗と宗敎は日增に濫造され、人道主義とか、恩寵生活とか、愛の、懺悔の奉仕のと、美しい御題目や御名號の囂々たる反比例に、說法や傳道は眞理の光明を開かうとする能動性を麻痺せしむるは愚か、活辯や講談を尊重せざるを得ざるに至らしめ、心あるものを

して餘りの愚劣俗惡に涙〻ましむる外にはたゞ罪惡の醱酵素たるばかりではないか神は殺され佛菩薩は葬られて、慈善事業、社會事業、救濟事業、感化事業は、富者、强者の護身器と化し、敎育は人道を獸道若しくは器道に轉轍せしめ、因果の辱めらるゝと共に、業報は尊重せられて、前科者は世に持て囃され、破倫不道德は此上無き榮なるかの如く、取引あつて交游無く、暗鬪あつて公爭無く、妥協あつて糾彈無く、權利あつて義務無く、廣告ありて主張無く、雷同ありて獅子吼無く、器械ありて人間無く、都會ありて田舍無く、金錢ありて涙腺無く、官能ありて靈性無く、悲喜劇ありて人生無く、賣女ありて不賣女無く、新女ありて老女無く、避姙者墮胎者あつて、寶母無く、同棲ありて夫婦無く、俱連宿ありて家庭無く、女子ありて男子無く、而も天才ありて不良靑年無く、篤志家、溫情家は隨所に充ち滿ち亦一人の薄志家、冷情家無く、豫言者ありて宗敎ゴロ無き、電華燦爛たる深暗に天女の往來ふ和氣洋々たる都會の、危惧不安な泰平の浪に渦卷かれては、そゝろに或人の「神佛、眞理、人道、正義とい

ふものが無かつたならば人生は怎麽に幸福であらう。信仰、信念、懺悔、奉仕、あゝ何と恐ろしい聲ではないか」との憤叫が思ひやられ、「爾が隣人を愛せよとは爾等の聞きし所なり。されど我、爾等に告げん、爾の隣人を憎み之を呪ふべし。爾、善良なれとは爾等の聞きしところなり。されど我、爾等に告げん、惡逆暴戾こそ爾の善良なれ」との涙訓も偲ばれる。憎の宗教、魔の哲學、地獄の涌出を物狂はしきまでに念じたくなつて來るのに無理があらうか。「よしや惡人の敵たるとも善人を友とする勿れ、寧ろ無智と讐たるとも智者と親しむべからず」と誡めたくなるではないか。浪費を強ゆる物體は夥しいが、女は見たくも見當らず、淫肉傳播の蜘蛛狀菌は慄然とするほど發き生くが、貴婦人令孃とは三下り半を夫の面に叩きつけて仇し男の許に突ッ走る莫連女や運轉手と騙落する淫奔娘、身持の不思墮落を咎むる母に、亡父の愛刀を差付けて、亡父と共に實母を心殺す不思墮落女、財産擁護の爲には一人娘すら鼠の身代りたらしめて顧みない寡婦等の別名か。他家の子を金錢暴殖器たらしめて、ビリヤー

ドのボール同然、磨滅用を爲さゞるに至れば弊履の如くに打棄つるも、富者の常習として敢へて怪む者も無く、奸商と結托して私利を營む殺人官吏、美人局にかゝつて人妻を殺し山に逃れた子爵もある。賣女淫婦に誑かされて恩人に背き、妻を棄て子を棄つる一學究に序幕が開かれて、二幕目には金罰か財難か、大富豪凶殺の活修羅場、續いて白戀女王出奔の派手やかさ。次は東京驛頭に匕首一閃の血みどろ幕。正しく社會は一種のシーターではないか。獨占的共産喇叭の囃し方もあれば、公共事業を名として脱税財團を組織する人氣役者もある。然しそれ等は手段の拙劣な、淺薄愚昧な子供劇に過ぎないが、眞の惡役や敵役はそれ等を罵詈嘲笑する觀客中にあるのは論外だ。多くの人に多くの人を殺させながら、自らも覺らざる惡其物の結晶が堂々社會に羽振を利かし、無數の人素を搾奪して己れを肥す賊其物の凝塊が傲然天下に横行して、殺人放火、盗賊以外、人無きかに思はれる。性慾と食慾と、法律と、問題はたゞこればかり、法網愈密にして犯行益滋く、司直の府にある人々は奔命にこれ苦し